信州と九州の古代史が示唆する「魏石鬼八面大王」の実像!!

No 2

前号(2018 /6 VOL.35-1)では、魏石鬼八面大王の取材行とその実像として、安曇一族(磐井・安曇族)が九州を離れるに至ったその具体的要因と彼らが九州においてどのような国造りを実践していたのかなどや、筑紫君磐井に関した古文献(日本書紀・古事記)の記述の矛盾点および改竄点などを明らかにするとともに、以下の事柄についても解説した。

・古代九州では筑紫君と尊崇されたキング磐井の統治下で太陽王国(人間の王国)が形成されていた。

・王国の基本は宇宙とのコンタクトから派生した太陽円盤崇拝思想と法律による正義の政治の遂行であり、その状況を石製象形遺物(石人・石馬)などで表現した。

・近隣諸国は磐井を倭国の偉大なキングと讃え毎年筑紫の国を訪れ謁見、朝貢した。

・527年、近畿のヤマトが挙兵して太陽王国に武力侵攻を開始した。

・ヤマトの挙兵の可能性を事前に察知した九州では磐井を総帥とする連合軍(含む諸外国からの義勇兵)を結成、戦闘に備えた。

・戦闘は1年以上に及んだが528年初冬ヤマトの偽計工作により太陽王国の本拠地が陥落、磐井は行方知れずとなった。

・磐井一族(以降安曇一族)数百名は目的地も定まらぬままに九州安曇の地を船で緊急脱出した。等々・・・・・・・・・・・・・・・

今号では大混乱の最中、九死に一生を得た安曇一族がこれといった準備もないままに玄

界灘に船出し、最終的に到達した信州までの移動ルートと、何故に1,200kmもはるか彼方の信州(信濃＝長野)の地を目指すに至ったのかなどについて考察する。

また信州とその周辺の埋もれた古代史を発掘しつつ、八面大王(ヤメノオオキミ)を輩出した安曇一族にスポットを当てた。

◎安曇から出雲へ◎

玄界灘に船出した安曇一族は、既にヤマトによって海上封鎖がなされていた瀬戸内海、佐賀、長崎方面を避けて、日本海側を北上するルートに活路を見出した。

その途上において水や食料などの補給地点と、しばしの休養や態勢の立て直しをはかるための一時的な上陸地点の検討がなされた。

当然のごとく補給地点、上陸地点には、石製象形遺物（石人･石馬等)や積石塚、蕨手刀、ストンサークル、及び古墳などに描かれ、刻まれた太陽マーク（円紋･同心円紋･蕨手紋･渦巻き紋･三角紋･連続三角紋･直弧紋など）に象徴される人間の王国(太陽王国)が形成された地域が選ばれたはずで、それらの地域が移動ルート解明の重要な手がかりとなる。

そこで日本海側の玄界灘、山陰、北陸地域に照準を定めて目安となる遺跡を探索した。

すると太陽王国の所産に該当する以下の遺跡が浮上した。

･福岡県糟谷郡新宮町　相島古墳群

【特徴：積石塚 4世紀～7世紀】

･山口県萩市見島　ジーコンボ古墳群

【特徴：積石塚 蕨手刀 7世紀～9世紀？発掘状況1割】

･島根県松江市曽志町　丹花庵古墳

【特徴：連続三角紋　5世紀末】

･　〃 松江市西持田町　日吉垣の内古墳

【特徴：連続三角紋】

･　〃 松江市大草町　岩屋跡(後)古墳

【特徴：イカシシロシの刻画 6世紀後期】

･　〃 安来市吉佐町　穴神1号横穴古墳

【特徴：三角紋 蕨手紋 人物　6世紀中期】

･鳥取県米子市定江町　石馬谷古墳

【特徴：石人 石馬 盾 6世紀中期～後期】

･　〃 倉吉市福庭　福庭古墳

【特徴：連続三角紋 7世紀】

･　〃 鳥取市国府町　梶山古墳

【特徴：同心円紋 三角紋6世紀末】

･福井県福井市小山谷町　小山谷古墳

【特徴：同心円紋 4世紀末～6世紀】

･　〃 福井市足羽山付近 西谷尾佐越古墳

【特徴：同心円紋 菱形紋4世紀末～ 6世紀代】

以上、王国の顕在性を窺わせる多くの遺跡

石人山古墳公園の武装石人のレプリカ。上半身全体に太陽マークが刻まれている（福岡県広川町）

以前は岩戸山古墳に立っていた陣ケ原の石人（大分県日田市）

が日本海側沿いに点在しており、これらの遺跡所在地を線で結ぶとそれが移動ルートとなる可能性が高いと推察された。

そこで安曇一族との深い関係が指摘されている博多湾の志賀島付近から約20隻の船団が出航したと想定して、その航跡などを地図上に辿り当時の状況を再現してみた。

志賀島付近を出航するとまもなく北東方向に相島が見えてくるが、未だヤマトの監視の目が光る危険海域なのでここへの寄港は断念した。

しかし相島に駐屯中の安曇海軍の残留部隊がヤマトと一族との遭遇を懸念して、安全海域である次ぎの寄港地見島（山口県萩市）付近まで一族を護衛した。

見島にも同海軍の部隊が駐屯していた。

ここではその次ぎの寄港地と考えられる出雲地域までの必要最低限の水と食料を補給し、数日間休息をとる。

相島と見島の護衛部隊が交代、相島の部隊はヤマトの追撃に備えて帰投する。

一族は出雲（島根県東部と鳥取県西部の地方）を目指して出港する。

出雲に到着した一族は日本海から美保湾、境水道を経由して中海に至り、中海の西側に位置する出雲地方（松江地域から東側の米子地域）に落ち着いた。

出雲地方には、その証左となる大変興味深く特質に値する古墳が二つ残されている。

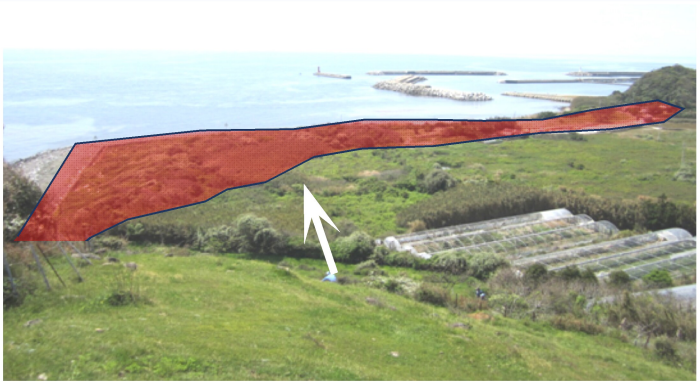
稀有な刻画の遺物が発見された松江市の岩屋跡（後）古墳と、一族との関係性が強く指摘される米子市の石馬谷古墳である。

実は岩屋跡（後）古墳の遺物の刻画と酷似した壁画（刻画）が、直線距離にして約1,300ｋｍ以上も遠方の北海道・余市町のフゴッペ洞窟及びその地点より北の西沿岸部と、さらに北方の樺太（サハリン）でも同様の刻画が発見されている。

大正年間の考古学研究では、この刻画をアイヌのイクパスイ（奉酒ベラ）と関係付けてイ（エ）カシシロシと呼称した。

また余市町から約15km東の小樽市・手宮洞窟の古代文字（古代トルコ・突厥・古代支那・靺鞨文字）と同系統とされるフゴッペ洞窟（1世紀

円墳と方墳を主体とする4世紀～7世紀頃の相島古墳群（【積石塚】福岡県新宮町）


7世紀～10世紀？に構築したと推定された三島ジーコンボ古墳群（赤色部分）【積石塚】東北の新式と類似するワラビテ刀が出土している（山口県萩市）

～5世紀頃)の刻画の起源は、北東アジアの大河アムール(黒竜江)の下流域サカチ・アリァンであることが明らかとなっている。

「太陽の舟」や「有翼人像」などといった刻画スタイルや太陽神にまつわる伝承の所有者である彼らは、宇宙へ志向した太陽円盤崇拝思想の持主なのであった。

はるばる大海を越えて渡来した余市周辺は、忍路、西崎山に代表されるストンサークルのメッカでもあり、それらの稼動時には人間らしく生きる人々のみが制御可能であった特殊なエネルギー波動が湧出していた。

ストンサークル(含むメンヒル)とこの特殊エネルギーとの関係性は、英国のオックスフォード大学が実施した「ドラゴン・プロジェクト」によって明らかにされた。

1988年9月22日～23日、忍路ストンサークル(小樽市)において本誌ＳＲＤ（科学調査部門）が実施した24時間体制での磁力測定でも明らかな異常波動が検出された。

縄文後期の忍路ストーンサークル、構成する石単体の規模では日本最大級(北海道小樽市)

つまり大陸から渡来した人々はこの余市の地域に偶然に漂着した訳ではなく、母国と同様の特殊な波動をここ余市に感じてこの地を選んだ確率が高いと考えられた。

また余市のシリパ山とその周辺には約50基の積石塚の存在が報告されている。

サハリンと北海道、そして出雲で発見された特異な刻画や余市、見島(山口県)、相島(福岡県)に築造された積石塚などは、太陽王国の本拠地の防衛を目的として大陸から渡来した義勇兵(モンゴル系語族・ツングース系語族)の存在を強く示唆しているのである。

大陸からの義勇兵の渡来と同時に余市周辺を含む石狩低地帯には後北式土器(後期北海道式薄手縄文土器)、別称江別式土器文化(1世紀～5世紀)が開花する。

太陽マークである円紋などの文様スタイルにより年代区分がなされているが、最古と見られる後北式土器は余市町のフゴッペ洞窟前庭からの出土である。

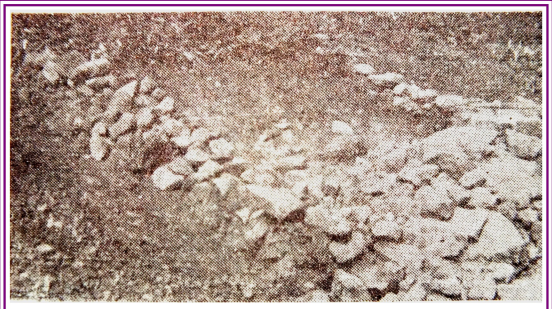
その後、時代の変遷と共に後北式土器は道央から全道、東北全域、新潟平野へと南下、他方南千島、サハリン南部へも拡散を見せ一大土器文化圏誕生の様相を呈している。

ここで少し本題からそれるが、民族のルーツや移動経路、および他民族による支配状況

岩屋跡(後)古墳から出土した土器片、イカシシロシと模様が類似(島根県松江市)

イ(エ)カシシロシと呼ばれたフゴッペ洞穴刻画

シリパ山麓の余市神社横の積石塚（北海道余市町）


余市町シリパ山に構築された シリパケールン群【積石塚】約4mの円状のものと直径約30mの楕円状ものなど約50基が確認されている（北海道余市町・余市の観光案内より）

太陽マークが装飾された後北式土器

などを解明するための重要な研究データである『Y染色体ハプログループ(父系型集団)』の分析結果に基づいて、日本の先住民と渡来民族および他の民族との関わり合いについて見てみよう。

文部科学省の検定済み教科書には記載されていない日本の先住民族の問題や列島において大勢を占めているヤマト民族のルーツが明らかとなってくるのである。

◎Y染色体ハプログループが示唆する民族のルーツ及び支配状況◎

日本および東アジア・東南アジア・北アジア(含む北東アジア)では、Y染色体ハプログループのC型【C1a1・C2】、D型【D1a・D1b】、N型、O型【O1a・O1b(O1bi・O1b2)・O2】が全体の9割以上を占め、一部を除いて各グループへとさらに分岐する。

C2型：北アジア(含む北東アジア)、東アジアに広く分布する。

主にモンゴル系語族(モンゴル、ブリアート他)やツングース系語族(オロチョン、エヴェン、エヴェンキ、コリャーク、ニブフ他)などに高頻度(47%～91%)で観察される。

太陽王国の本拠地の防衛に参戦した義勇兵は、このC2型の遺伝子の持ち主である。

日本人の平均値は約3%であるのに対して、アイヌでは25%、北部九州の福岡では7.8%と比率が高く、次いで大阪の7.5%、札幌の一般男性7.3%と続き南の沖縄ではほぼ観察されない。

参考までに紀元7世紀中頃、東北、北海道のエミシ(アイヌ)を武力侵略したヤマトに対して粛慎(ミシハセ)が道南の奥尻島や佐渡島で防戦した状況を日本書紀の斉明天皇の条が記しているが、粛慎(ミシハセ)はC2型に該当するツングース系語族である。

D1a型：東アジアに限定的に分布する。

チベット人(49%)では高頻度で観察され、他に中国の少数民族のイ族(16.3%)、ミャオ族(8.6%)、そしてマレー、ベトナム、タイなどに数%見られる。

日本では1%未満であるが、ほぼ日本に限定されるD1ｂ型の姉妹群。

D1b型：日本列島に集中的に分布する。

なかでも北のアイヌ(75%～88%)、南の沖縄(55.6%)に高頻度で観察され、日本人の平均値は約39%と比較的高く、縄文人を祖としている。

朝鮮民族にも数%ほど見られるが、チベットの姉妹系統(b1a 46.6%)を除くと他の民族には観察されない。

N型：北アジア、ヨーロッパ北東部に多く分布する。

ヤクート人(約95%)、ガナサン人(92%)、チュクチ人(58%)に高頻度で観察される。

他にユカギールとイ族が各30%、コリャーク(22%)、エヴェンキ(19%)、漢民族・華南(15%)などに多くみられ、日本では1%前後である。

O1a型：東南アジアの半島、島嶼部に多く分布する。

台湾原住民(90%)、フィリピン(43%)、インドネシア西部(20%)、漢民族・華南(15%)に高頻度で観察され、ミャオ、マレー、ベトナム、タイ、満州民族に5～7%ほど見られる。

日本では2%前後である。

O1b型：東アジア(朝鮮半島、中国南部)、東南アジアに多く分布する。

タイ(43%)、朝鮮民族(40%)、漢民族・華南(30%)、マレー(34%)、ベトナム(31%)、インドネシア西部(28%)などに高頻度で観察される。

他にニブフ、満州民族、ミャオ、イ族に10%前後見られる。

日本でも34%と比較的頻度が高いが、アイヌは0%、沖縄は22%と平均値を下回っている。

学者の多くは01b型の起源を中国南部の長江文明に求め、子系統である01b2の集団が移動を開始したのが約2,800年前で、長江文明の衰退に伴い01b1および一部の01b2の集団が南下したという。

その集団は南百越(古代中国大陸の南方、主に江南と呼ばれる長江以南から現在のベトナム北部にいたる広大な地域に住んでいた越諸族の総称)と呼ばれた。

残りの01b2は西方および北方へと移動して中国の山東省、朝鮮半島へ定住した。

さらに日本列島へ渡った01b2の集団が倭人であり、弥生人(ヤマト)であるようだ。

O2型：ハプログループOのサブグレード(細分岐)の一つである「M122」の子孫の系統で、東アジア(朝鮮、中国北部、満州、チベット他)、東南アジアに多く分布する。

ミャオ(69%)、漢民族・華北(66%)が高頻度、ベトナム(41%)、朝鮮(40%)、満州民族(39%)、インドネシア西部(36%)、チベットとニブフ(35%)、チュクチ、ミャオとイ族(33%)、ベトナムとユカギール(31%)、タイ(29%)などが中頻度で観察される。

またビルマ系民族が最大87%、朝鮮民族が最大51%との報告もある。

O2型の日本での比率は18%～20%であるが、地域的には九州が26.4%と高い。

しかし、北部九州の福岡では11%と低く、アイヌに至っては0%である。

日本国内の分布は九州北部(除く福岡)～本州中部に多く、O2－M112系統の一部が縄文時代の終焉ころにミレット(雑穀)農耕をもたらしているが、その大部分は弥生時代以降の中国大陸および朝鮮半島からの流入である。

以上、Y染色体の各ハプログループについて概説した。

ここで日本列島の歴史と深くリンクしていると考えられるY染色体ハプログループの日本列島における分布状況に基づいて、多様な視点から考察を加えると、以下の状況が推察

できたのである。

☆C2型集団☆

何れ朝鮮系ヤマトによる九州太陽王国への武力侵略(渡来)が開始されることに危機感を抱いたモンゴル語族および東アジアのツングース語族を起源とする有志の集団が、特別のミッション(使命)の遂行を目的として弥生時代(紀元1世紀前後)に舟で大海を渡り北海道・石狩湾に渡来、フゴッペ洞窟内に重要な痕跡を残した。

主に石狩川下流域の江別に拠点を置きその周りに定住したが、後本州方面へと南下した集団もいた。

アイヌとの血縁が強く、また後北式土器の担い手でもあり、積石塚古墳(岩手・山形・新潟・長野・山梨・香川・徳島・山口・福岡)などとも深く関係している。

彼らはヤマトの動静を窺いながら紀元5世紀ころ、東北岩手のD1b型(縄文系日本列島原住民)の傘下に入り彼らと共に王国の防衛を目的として九州福岡へ船団を組んで移動した。

彼らはエジプト、北欧に見られる“太陽の船思想”の持ち主で、九州においては太陽王国の海軍の主力部隊となって活躍する。

☆D1b型集団☆

約3万～4万年前に日本列島に到達した人たちの子孫である縄文人をその起源とする日本固有(除くチベットD1a)の型とされ、そのＤＮＡはアイヌに多く受け継がれており、北海道のみならず日本列島の先住民(原住民)がアイヌであることを科学的に立証している。

また列島全土に分布する縄文土器もそれを裏付けている。

D1b型が北のアイヌと南の沖縄に高頻度で観察されるのは、渡来人(弥生人)ヤマトより武力侵略を受けたその影響の何ものでもない。

ヤマトは、天(宇宙)とは無関係で正当性のないアマテラスを太陽神として祀り上げ、その末裔を自認する天皇の名において、欧州・北米の物質文明国にさきがけてD1bである「先住民」または「太陽民族」への抹殺計画を実行した。

ヤマトの東奔西走した侵略戦争の歴史がそれを雄弁に物語っている。

ヤマトに侵略、抹殺されたとは云え、太陽神とのコンタクトから生まれた人間文化の担い手であった縄文アイヌの栄光あるＤＮＡは、今日も尚日本民族の約4割の人々に脈々と受け継がれているのである。

また、このD1b型は何故か国外では唯一朝鮮民族にのみ2%～3%程度観察される。

この数値は古代における日本列島から朝鮮半島へのD1b型の集団渡来を意味することになるが、侵略者ヤマトの故地である危険な半島へと、古代のどの時代にどのような目的のために海峡を渡ったのだろうか。

きっと半島のどこかにそれを確証付ける痕跡が残されているはずだ。

弥生文化を始めとして朝鮮から日本へと文化が流入したとの見方が一般的であるが、最近の日韓共同古代史研究によると、日本から朝鮮への文化の流入が報告され、日韓古代史の再検証が求められている。

その一例が半島西南部の栄山江流域（全羅南道・全羅北道)に点在する計16基の前方後円墳(含む可能性3基)なのである。

墳形、埴輪・副葬品や土器など、とりわけ北部九州に起源をもつ独特の9基の横穴式石室の構造から、北部九州古墳との強い類似性が指摘され、同様の石室は半島中南部の松鶴洞大1号墳(慶尚南道)などにも認められる。

他に公州丹芝里には23基の横穴墓群が存在

日本人および周辺(日本からおよそ5000km以内)の諸民族Y染色体ハプログループ(父系)の割合比率(%)

		n	C		D		N	O		
			C1a1	C2	D1a	D1b		O1a	O1b	O2
日本(2007) Nonaka他	日本	263	2.3	3.0	0.4	38.8	0.8	3.4	34.3	16.7
Hammer他	アイヌ	4	0	25.0	0	75.0	0	0	0	0
	青森	26	7.7	0	0	38.5	7.7	0	30.8	15.4
	静岡	61	4.9	1.6	0	32.8	1.6	0	36.0	19.7
	徳島	70	10.0	2.9	0	25.7	1.4	0	32.9	21.4
	九州	53	0	7.5	0	26.4	0	0	35.9	26.4
	沖縄	45	4.4	0	0	55.6	0	0	22.2	15.6
日本(2014) Sato他 S=大学生 A=成人男性	長崎S	300	3.3	5.3	0	30.0	1.3	0	35.0	23.7
	福岡A	102	5.9	7.8	0	33.3	1.0	2.0	35.3	10.9
	徳島S	388	5.7	5.9	0	30.6	1.0	1.8	35.6	17.8
	大阪A	241	6.2	7.5	0.4	31.2	1.7	1.2	29.0	22.5
	金沢S	291	3.4	6.4	0	32.6	2.3	0	36.2	18.5
	金沢A	232	4.7	5.6	0	32.7	0.9	3.0	31.0	21.9
	川崎S	321	5.6	5.9	0.3	33.0	1.6	0.9	34.6	17.8
	札幌S	302	4.4	5.0	0.3	33.1	0.7	1.3	32.3	20.3
	札幌A	206	3.4	7.3	0	35.0	1.0	1.0	32.1	19.9
	計 (平均値)	2390	(4.7)	(6.1)	(0.1)	(32.1)	(1.3)	(1.2)	(29.6)	(18.7)
日本(2004) Tajima他	アイヌ(北海道日高)	16	0	13	0	88		0	0	0
	本州	82	5	1	0	37		0		20
	九州	104	4	8	0	28		2		24
日本(1999) Sato他	宮崎	270			35.2					
日本(1999) Shinka他	沖縄本島中部	61			30.0					
	沖縄本島南部	99			45.0					
	八重山	27			4.0					

日本人および周辺(日本からおよそ5000km以内)の諸民族Y染色体ハプログループ(父系)の割合比率(%)

		n	C		D		N	O		
			C1a1	C2	D1a	D1b		O1a	O1b	O2
東アジア (2006) Hammer他	朝鮮民族	75	0	9.3	0	4.0	2.6	2.6	40.0	40.0
	満州民族	52	0	26.9	0	0	5.7	5.7	9.6	38.5
	モンゴル	149	0	52.3	2.6	0	8.0	0.7	1.3	22.8
	漢民族(華北)	44	0	4.5	0	0	9.1	0	6.8	65.9
	漢民族(華南)	40	0	5.0	0	0	15.0	15.0	30.0	32.5
	※イ族	43	0	2.3	16.3	0	30.2	0	9.3	32.6
	ミャオ	58	0	3.4	8.6	0	0	6.9	10.3	68.9
	チベット	105	0	1.9	46.4	0	2.9	0	0	35.2
	台湾原住民	48	0	2.1	0	0	0	89.6	2.1	6.3
東南アジア (2014) Trejaut他	フィリピン	40	0	0	0	0	0.7	42.5	3.4	15.0
	タイ	75	0	0	2.7	0	0	5.3	42.7	29.3
	ベトナム	70	0	4.3	2.9	0	2.8	5.7	31.4	40.9
	マレー	32	0	0	3.1	0	0	6.3	34.4	31.3
	インドネシア(西部)	25	0	0	0	0	0	20.0	28.0	36.0
北アジア (2013) Duggan他	ヤクート	184		2.1			94.5			0.5
	ユカギール	13		30.8			30.8			30.8
北アジア (2006) Hammer他	アルタイ	98	0	22.4	0	0	4.0	0	0	1.0
	ブリヤート	81	0	60.5	0	0		0	0	2.5
	エヴェンキ	95	0	68.4	0	0	18.9	0	0	0
	オロチョン	22	0	90.9	0	0		0	4.5	0
北アジア (2002) Lell他	コリャーク	27	0	59.3	0	0	22.2	0	0	18.5
	チェクチ	24	0	4.2	0	0	58.3	0	0	33.3
	ニブフ	17	0	47.1	0	0	0	0	11.8	35.3
北アジア (2004) Tambet他	ガナサン	38		8.3			92.1			
	ケット	48		6.2						

※イ族（中国の少数民族）　　O1b(含むO-Mq5・O1b2)　　O2(旧O3)

しているが、これらの横穴墓群と九州一円に分布する初期型の横穴墓群との構造スタイルの類似性が指摘されている。

さらに加耶地域(慶尚南道)から出土の3世紀～6世紀の考古学資料の相当数が九州と関連すると専門家が報告している。

栄山江流域に限らずこれらの地域には九州から渡来したD1b型の人々の「工人」としての影響が色濃く残されているのである。

半島の前方後円墳や横穴墓の築造年代は5世紀後半から6世紀前半で、太陽王国(人間の王国)のキング・磐井が統治していた最盛期の時代と一致する。

だが王国崩壊以降、半島では前方後円墳はおろか横穴墓もまったくといってよいほど築造されることはない。

つまり朝鮮半島の前方後円墳や横穴墓は、磐井や、磐井が築いた太陽王国と極めて密接にリンクしていることとなる。

これらのことから『紀元5世紀後半、人間の王国の建設をミッションとしたD1b型の挺身隊的集団が朝鮮半島に渡り、精神的、物質的に朝鮮南部の太陽王国の建設任務に従事したことが判明する。

半島に点在する前方後円墳や横穴墓などは、その成果の表れである。

しかし王国崩壊後、かれらは日本へ帰還することなくその地に留まり永住した。

今日半島で観察されるD1b型2～3%のＤＮＡは、主に『5世紀後半に半島に渡り王国の礎を築いた九州の磐井傘下の先住民アイヌの、その子孫達に受け継がれてきた』のである。

また古代日本と半島との交流には複数の系統が存在しており、6世紀初期までの本流はヤマトではなく、磐井の系統であった。

参考までに太陽王国の所産と関係する前方後円墳は、太陽神とのコンタクトもしくはその流れを汲むD1b（先住民)のキングの墓であり、ヤマト系の古墳とは無関係なのである。

宮内庁が畿内の巨大な前方後円墳を歴代の天皇の墓に指定して真実を覆い隠すべく考古学者が要望する発掘を拒絶する理由もそこにある。

石室などから太陽円盤マーク(太陽マーク)などの先住民系の古墳である証拠が発見されることを極端に恐れているからに他ならない。

現在宮内庁では85基を陵墓に指定、参考地を含め896基を管理陵墓としている。

また弥生時代の青銅器の分布状況から北部九州地域を仮に銅剣(含む銅鉾･銅戈)文化圏、近畿、東海地域を銅鐸文化圏と考古学者は呼んでいるようだ。

それらのはざまとなる四国と中国は両文化圏がオーバーラップする地域である。

これらの銅剣、銅鐸文化圏の違いは、先住民側がヤマトの持ち込んだ“武器”である銅剣(含む銅鉾･銅戈)を受容したか、否かでその違いが生じ、ヤマトの勢力範囲や武力侵略の歴史と密接に関連してくる。

銅剣の使用を拒絶した地域では、それを大量に鋳直して銅鐸を製造、二度と使用されることがないようにと土中へと投棄している。

また出雲地域では大量の銅剣を直接土中へと埋設している。

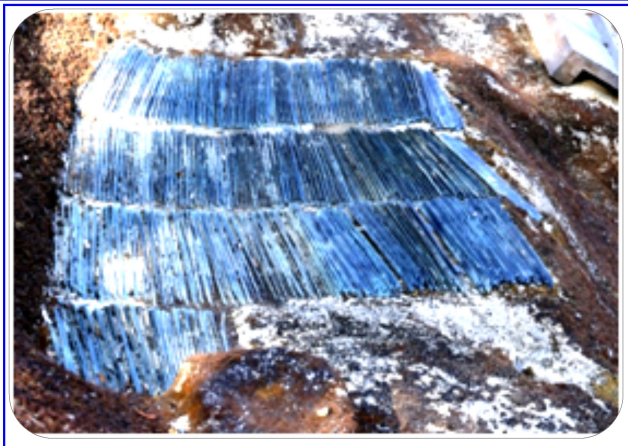
列島においてヤマトの侵略に抵抗した多くの首長のＤＮＡはD1bであると結論付けることができる。

☆O1b型集団☆

主に中国を起源とする。

サブグレードのO1b2(含むO-47z・旧名称O2b)が中国の山東省と朝鮮半島に定住した。

半島では部族間抗争が絶え間なく繰広げられ、勢力が衰退して主導権を失った部族が日



弥生時代の青銅器埋納遺跡である神庭荒神谷遺跡。丘綾斜面から銅剣358本。銅鐸16個。銅鉾14本が出土した。青銅の製造には、錫と同時に添加されることの多い鉛の同位体の比率が産出鉱山ごとに異なるので、分析により原産地を推定できる。
分析結果によると、343本は中国華北、14本は華北と朝鮮の混合、1本は朝鮮が原産地であると判明している。
ヤマト側の手に渡ることを懸念した平和主義者の太陽王国の民(原住民)が、銅のインゴットから鋳造したか、或いは銅剣などを鋳直し銅鐸とともに故意に土中へと埋めた。(島根県斐川町)

本列島へと渡来した。

その主たる集団が物質文明の申し子である弥生人たちである。

水稲農耕、金属器(青銅･鉄)、機織、環濠集落などの特有の文化に象徴され、板付(福岡)、吉野ヶ里(佐賀)などが彼らの代表的遺跡である。

福岡国際空港や土井ケ浜遺跡(山口県)から出土した縄文人とは明らかに異なる面長な頭骸骨は典型的弥生人で、ＤＮＡは01b2である。

当初彼らは北部九州のサルタ族を懐柔して福岡、佐賀地域に定住した。

境を接する南側(現熊本地域)には人間の王国を築いていた先住民系クマソ(狗奴国)が控え、そのクマソへの武力侵略を幾度か試みるも撃退され試みは徒労に終わった。

そこで九州を諦めて東方に活路を見出すべく近畿地方へと東征(神武東征)している。

詭計と最新鋭の武器(鉄器)を用いて先住民の雄“生駒(奈良県)のナガスネヒコ”や和歌山･奈良の戸部に続いて伊賀(三重県)の“伊勢津彦(別命･タケミナカタ＝出雲建子命又は伊和大神)”などを攻略して畿内を平定、武力国家を築き上げた。

熊野地域での戦闘では、先住民系丹敷戸畔(D1b)との戦闘で神武軍が大打撃を蒙っているが、3本足の紋章で表現された“ヤタガラス”が神武軍の救援に駆けつけとことで難を逃れている。

この3本足の紋章で表現された高句麗・百済系統の“ヤタガラス”は、紛れも無い半島からの侵略者である01b2の持主である。

平成13年(2002年)12月、今上天皇が自身の誕生日の記者会見の席上において「百済王室の血筋が日本の皇族に流れている」と語ったことからもそれは明白である。

その後彼ら(ヤマト)は、幾度と無く東北、九州方面へと武力侵略を繰り返して遂に日本列島を制圧したのである。

彼らは日本列島に非人間的な物質文明と戦争を持ち込み最終的には太陽王国を崩壊へと導き、先祖のアマテラスを太陽神、鏡を太陽円盤と偽証して先住民を欺き、それを強制的に崇拝させる神社信仰を確立した。

その頂点が伊勢神宮であり、天皇を神として日本国民に崇拝させ、命をも供出させた世界最大のカルト教団の誕生である。

20世紀に至り連合軍に対抗して独裁国ドイ

ツ、イタリアと三国同盟を締結して世界制覇を目論んだが、300万人以上の犠牲者を生み出したその無謀な戦いは失敗に終わった。

現在では官民一体での原子力政策に特化し、福島の核事故に懲りることなく核兵器の開発を可能とする既に破綻した原子力事業(原発・再処理事業)や原発輸出の推進に余念がない。

それを根底から支えているのが“死の商人”である世界の核兵器メーカー及び原子力産業界に巨額の投融資を行っている日本のメガバンクたちなのである。

既にお気づきであろうが、このハプログループO1b2とは朝鮮系ヤマト民族で、日本人の約37%にこの遺伝子が認められる。

かつて日本列島全土に居住した縄文系アイヌであるD1bに行った O1b2(ヤマト民族)による悲惨な民族支配の歴史が浮き彫りとなっている。

そして現在の日本人の約8割以上は双方のＤＮＡを引き継いだ混血なのである

☆O2(旧O3)型集団☆

主に東アジア(ビルマ、華北の漢民族、ミャオ族)を起源とする。

早くは縄文時代に日本に流入しているが、主流は弥生時代以降に中国大陸および朝鮮半島から流入、その流入の波は複数回に及んでいる。

O1b2と比較すると渡来人口は少なくヤマトの本流ではないが、神社信仰と物質文明を推進するヤマトの構成員であることは間違いない。

北部九州から本州中部にかけて比率が高く、C2(北東アジア系の少数民族)の比率が高い九州の福岡県では日本の平均値である約17%の約6割にとどまっている。

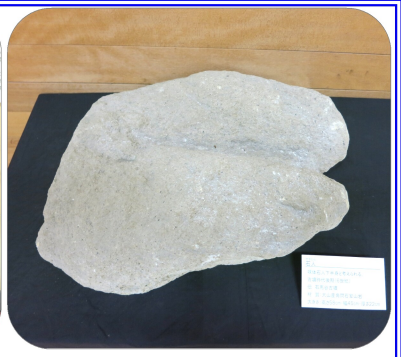
日本人を構成する比率では、D1b型（縄文アイヌ系）が約39%、O1b型（朝鮮系)が約37%で、O2型(中国系)がそれについで約17%である。

以上、Y染色体ハプログループの東アジアにおける分布状況である。

日本列島では縄文系アイヌが先住して太陽神オキクルミカムイとのコンタクトから太陽王国を形成していたが、朝鮮半島および中国大陸からの物質文明推進者である渡来人(後のヤマト)の武力侵略に対して、王国の民は勿論のこと外国部隊との連合軍を結成して奮戦するも、ヤマトの詭計に陥り王国本拠地が壊滅した。

結果、列島各地に残された王国の民がレジスタンス活動を展開したが、ヤマトの武力の前には如何ともしがたく、徹底的に蹂躙され

16基の向山古墳群の一つである石馬谷古墳【別称小枝山5号墳】以前は石馬が立っていた(鳥取県米子市定江町)



磐井との関係性を示唆する石馬と石人の下半身。、石馬谷古墳から約300m離れた天神垣神社の収蔵庫に大切に保管されている

スクナヒコナを祭神とする天神垣神社、チプサンキング(大国主)の偉業を讃えた八朔祭りが行われている

八朔祭り当日に天神垣神社に奉納されたオロチ族を想起させる60mのワラの大蛇

て今日の日本民族が出来上がったという悲劇の歴史が“Y染色体ハプログループ”の解析から判明してくる。

100万ケ所のヒトゲノム(全遺伝情報)の調査が可能となった最新の“核ＤＮＡ”の研究結果を分析すると、縄文系アイヌが大陸からのヤマトに侵略された構図が浮上してくる。

今日、正義を無視して飽くなき野望を追究する時の権力者たちの独裁的な横暴に対して、ほんの一握りではあるが各所で抗議、抵抗する人々が存在する。

ひょっとすると、日本人の約4割に及ぶ縄文系アイヌのＤＮＡ(血)が関与しているのかもしれず、意識無くそのＤＮＡに突き動かされているのかもしれない。

ここで再び安曇一族の移動ルートに話しを戻して鳥取県米子市の石馬谷古墳(別名坪根垣古墳)を検証する。

石馬谷古墳は米子市北東の淀江平野の丘陵に築造された向山古墳群(16基)の南東数百メートルに位置し、シカシシロシ系統の刻画が発見された岩屋跡古墳の東方約35kmの距離に築造された全長61mの前方後円墳である。

江戸時代には同古墳の横に「石馬」が祀られて「石馬大明神」として崇拝対象になっていたと伝えられている。

石馬に由来する古墳の名称しかり、それを示唆するかのように神聖性を表す赤色顔料が現在も「石馬」の一部に認められる。

また、下半身が欠損した石人も発見されている。

同古墳から数分の距離には地元民に親しまれている天神垣（アメノカミガキ)神社が建立されているが、明治期にはその境内で「石馬」が大切に保存されていたという。

現在は境内に建てられた収蔵庫に大切に保管されている。

この天神垣神社が在る上定地区では、熊本県不知火海の不知火(特殊ＵＦＯ)の出現日に当たる旧暦の8月1日、「八朔綱引き祭り」が行われ、綱引きに使用された藁蛇(オロチ)が同神社境内の荒神に奉納される。

荒神は別命山の神、火の神などとも呼ばれて西日本一帯特に山陽、山陰地方に顕著に見受けられる先住民系の土着神で、地域によっては樹木や大木の下の塚を荒神と呼んでいるようだ。

イチャルパ(先祖供養)、カムイノミ(神への祈り･願い事)はアイヌ民族の重要伝統儀式であるが、 元来太陽神信仰であったアイヌ

民族がアミニズム信仰へと転落したことで、最高神であるべきオキクルミカムイ(アエオイナカムイ)がいつの時代からか正体不明の“火の神”に置き換わってしまっている。

それと同様のことがここ西日本でも発生している。

先住民族アイヌにコンタクトして大国主（オオクニヌシ）の国造りに援助の手を差し伸べた“少名彦神”（オキクルミカムイ)が、いつのまにか“荒神”に置き換わっているのである。

同神社の天神の名称は、主祭神である少彦名神の通称名「手間天神(テマテンジン)」に由来している。

記紀によると、同神社から約12km西方に位置する粟島(現米子市彦名町)から少彦名神が常世の国(天)に飛び去ったと記述されている。

現在この粟島には少彦名神を祭神とする粟島神社が建立されており、出雲はオキクルミカムイと極めて縁が深い土地柄なのである。

石馬である石製象形遺物に人間の生様を刻み付けたキング磐井との強い関係性が指摘されるのである。

また天神垣神社や石馬谷古墳の南西約10kmの距離には上安曇、下安曇の地名が存在し、平安時代中期の承平年間(931年～938年)に編纂された『和名抄』には、「伯耆国会見郡安曇郷」としてその名が登場する。

そしてこの地域から数km圏内の東宗像古墳群では、北部九州にその祖元が求められる縦穴系横口式石室が採用されている。

一方、上定地区を含む鳥取県の伯耆地域西部および島根県の隠岐や出雲の限られた地域では、雲伯方言(出雲弁）に分類される“ズーズー弁(東北弁)”が話されている。

核ＤＮＡ解析によると、出雲地方は地理的に朝鮮半島に近く、出雲人のＤＮＡも大陸の人々に近くなるであろうと予想されたが、関東地方の人々のほうが出雲人よりも、大陸の人々に遺伝的には近く、出雲人のＤＮＡは東北人に近いという驚きの結果がでた。

古代における鳥取県西部から島根県東部一帯にはヤマトに抵抗した出雲という強大な国家が樹立されていたのは周知の事実であり、それを裏付けるかのようにここ出雲地域一帯には多くの古墳が点在している。

「オキクルミカムイ(少彦名神)」「石人」「石馬の神聖視」「太陽王国の世界統一を祝す旧暦の8月1日(シラヌイの日)の八朔祭り」「古墳の築造年代と石室内の太陽マーク」「上安曇･下安曇の地名」および「ズーズー弁」、そして「磐井が東北出身者」であるという諸々のデータを総合的に検討すると、九州安曇野を脱出した安曇一族がここ出雲の地において体制の建て直しを図るべく、この地に腰を落ち着けたとの結論に到達する。

だが山陰地域へのヤマトの侵攻が予想以上に速く、ここ出雲も安住の地ではなくなり、出雲からの移動を余儀なくされたのである。

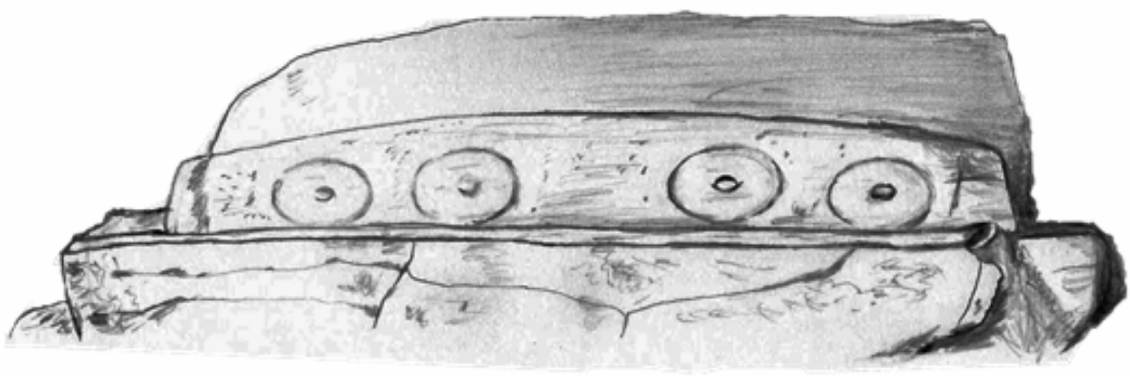
そこで十分に討議を行った結果、移住の条件を満たす最適の候補地として信州が浮上、その地域への移住が遂行された。

◎出雲から信州(信濃)へ◎

出雲での滞在期間は約30年～40年である。

石人、石馬の存在や築造年代などから推測して、石馬谷古墳の被葬者が磐井一族の近親者である可能性が浮上してくるし、その一族の総帥がここ出雲の地から、中部地方を含む東日本各地の反ヤマトの族長たちに結束を呼びかけ、ヤマトの侵攻に万全の体制で臨むよう必要な指令を出していたであろうことは容易に想像がつく。

本隊(一族)が出雲を出発する一年以上前に



太陽マークを装飾した小山谷古墳の石棺のイラスト
（福井県福井市）

は既に先遣隊が信州へと派遣され、入植地の決定と本隊の受け入れ準備が進められた。

梅雨と猛暑の時期を避けた4月から5月の佳日に必要物資を満載した十数隻が船団を組み、次ぎの寄港地となる北陸の福井を目指して出雲の境港を出港、日本海を北上した。

だが、一族の中には信州への移住部隊には参加せず、出雲に定着した人々も少数ながら存在した。

当然の如く福井にも太陽王国の所産は存在している。

福井市内の小山谷古墳及び西谷尾佐越古墳の石室や石棺に装飾された太陽マークがその傍証となる。

福井では九頭竜川河口域に停泊、地元民から歓待を受けるもその地では短期間の休息にとどめ、水と食料を補給後、再び日本海を北上、能登半島を迂回して次の寄港地である糸魚川に到着した。

ここ糸魚川には初代大国主(チプサンキング)の后となった“ヌナカワヒメ”の伝承が数多く残されている。

その影響が色濃く残る糸魚川で下船した一族は数日間の休息後、約100km内陸の安曇野を目指して姫川沿いのいわゆる古代の“塩の道”（後の千国街道・現在のR148およびR147）を南下した。

あるいは、舟で遡上可能な地点まで姫川を遡ったのかもしれない。

何れにしても、重い荷物を背負い婦女子を伴っての険しい道なき道の行軍では、1日せいぜい10～15km進むのが限界と推察され、屈強な男性は物資の運搬を繰り返し行ったのである。

糸魚川から安曇野までは約10日前後の行程であった。

九州安曇野を出てから既に約30年～40年が経過した紀元6世紀の中期から後期（560年～570年)の初夏に、地元民の応援も得て一族は無事信州安曇野の地を踏んだ。

紀元前13世紀頃、モーゼに引率されたイスラエル民族がエジプトからのエクソダスを敢行、40年間荒野を行軍したが、それを彷彿とさせる苦難の旅であった。

では海人族であった安曇族が、何故に舟を放棄してまで山深い信州の安曇野の地を目指して移住したのだろうか。

九州から信州への安曇族の移住問題を取り上げる歴史学者、考古学者の大半は、姫川のヒスイ(硬玉)採掘と貴重な食糧源である鮭の捕獲に答えを求めているが、そのような理由だけで1,200km以上もの苦難の旅を敢行する

だろうか。

あまりにも短絡的でどうも釈然としない。

彼らが九州から信州の地を目指して移住するには、それなりの確固たる理由が存在した筈である。

その理由とは!!

おそらく信州の古代史が深く関係していると推察されたので、安曇族の移住理由の解明の糸口となるであろう信州の古代史を探ってみよう。

◎古墳が示唆する
安曇野の本格的夜明け◎

安曇野市では多くの縄文時代の遺跡が確認されているが中期から後期にかけての遺跡が大半である。

弥生時代の遺跡数は縄文時代とは比較にならない程減少傾向にあり、その時代の集落跡も発見されていない。

古墳時代(前期・中期)に至っても遺跡数はまばらで現時点では集落跡も皆無であり、集落の出現は古墳時代の6世紀後半を待たねばならなかった。

安曇野ではこの6世紀後半以降に突然古墳が出現し始め、7世紀末までに旧穂高町域には小規模な87基（又は100基）以上もの円墳が構築された。

古墳はA群～H群の各支群からなる群集墳で、これらを総称して穂高古墳群と呼ぶ。

文化庁の調査(平成24年度)によると、県内の古墳の総数は2,831基(古墳・横穴)であるが、全体の約70%が善光寺平(北信地区)と伊那谷(南信地区)に集中しているという。

穂高古墳群は約300基を擁する安曇・松本平(中信地区)に属し、全体の8割以上を積石塚が占める善光寺平の大室古墳群(約500基)に次ぐ、県内では2番目の基数を誇る群集墳である。

特徴として、大半の古墳は北部九州をルーツとする横穴式石室を備えている。

長野県には北信、中信、東信、南信という地域区分があり、全ての地域では3世紀後半から5世紀中頃にかけて古墳が出現する。

しかし、安曇野地域での古墳の築造開始は6世紀後半以降で県内では極めて新しい時期に属する。

九州と信州及び安曇野の共通性を拾い出すと、前号でも紹介した安曇(アズミ)、有明、八女などの地名および食習慣(エゴ・馬肉)などがある。

それに加えて6世紀後半以降の突然の集落の出現と北部九州スタイルの横穴石室を組込ん

聖戦もむなしく凶悪なヤマトの刃に散った八面大王と136名の長の首が葬られた筑摩神社境内の飯塚神社と後方の首塚(長野県松本市筑摩)

ストーンサークルを内包する離山遺跡の看板、現在はゴルフ場

九州発祥の横穴式石室で構成された穂高古墳群の陵塚（みささぎ）A-1号墳（安曇野市穂高有明）

だ古墳の出現である。

これらの状況証拠などから推察して、旧穂高地域には九州安曇族が移住してきたのは疑いようのない事実である。

九州からの脱出が6世紀前半（518年～520年頃）で出雲での滞在期間は約30年～40年。

出雲から信州への移住の行程が順調であったと仮定して試算すると、安曇野への到着は550年～560年頃となり、古墳の出現時期は到着から約10年経過後の560年～570頃と推定される。

古墳時代の遺跡調査報告書を参考にすると、旧穂高地域での集落の増加と古墳の出現は6世紀後半以降であることから、安曇一族の到着時期とそれらはピタリと符号する。

また、この旧穂高地域には太陽神オキクルミカムイとのコンタクトから列島全域に縄文時代中期から後期にかけて構築され、晩期まで使用されていた県内有数の大配石遺構（ストンサークル系統）である離山、他谷両遺跡が存在しており、偶然に安曇族がこの地を選定した訳ではないのであった。

安曇（あづみ）としての名称は、大化二年（646年）の“改新の詔（かいしんのみことのり）”には、「科野（現長野県）国の阿曇郡（安曇郡）」として登場するが、改新の詔には（1）潤色説（2）造作説が付きまとい信頼性に乏しい。

一方、“八面大王蜂起事件”の約半世紀前となる746年頃（奈良時代）、正倉院に献納された麻布に、『信濃国安曇郡前科郷戸主**安曇部**真羊壹端（しなのこくあずみぐんさきしなごうへぬし**あづみべ**のしんよう いったん）』との記述がある。

研究者は、この記述を文献に登場する“安曇”の最古の記録と位置付けているようだ。

献納とはなってはいるが、実際は「祖庸調」という律令制下での租税制度に準じた強制的拠出が求められたのである。

となると、安曇族は既にこの時期にヤマトの支配下に組込まれていたとも受け取れるのであるが？

記録に登場した前科郷とは、現安曇野市明科地域一帯とその北に位置する池田町までの山麓に展開していた郷村で、麻の産地であった。

その前科郷は八面大王が統治していた旧穂高地区とは、地理的に南北に流れる犀川を境として東西に分離した状態となっている。

当然のことではあるが、安曇族には子々孫々にわたり九州において親族、友人、知人を殺害し、奴隷商人をも兼ねていたヤマトの非人道的残虐性は語り継がれていた筈であり、信州での侵略行為からもそれは熟知されていたことになる。

ということは、一族にとって過去も現代も同志に塗炭の苦しみを味合わせているヤマトへの献納は、言語道断の行為ということになるはずだ。

その観点から検討すると、安曇を名乗っている以上同族者であることは確かだが、その実、安曇部は仲間に苦役を科し、搾取するというヤマト同様の非人道的行為を行っていた「権力者」クラスの人物だった可能性が高い。

そのような者達は“俘囚”(同族を裏切りヤマトに帰属した蝦夷)あるいは、後世の北海道では“オミカタアイヌ”と呼ばれ、ヤマトにとっては利用価値が高かった。

反面、ヤマトの軍門に降った輩は、アイヌ(人間)に非ずと同族から蔑まれたのである。

この時期、信州の国府が上田から松本へ移されたと考察され、鬼門(北東方向)の賊と恐れられた蝦夷(東北の先住民)討伐を目的として設けられていた古東山道(京都から奥州へ至る道)が信州を縦断、横断していた。

旧東山道の信州の主要通過地点は、まず岐阜と信州との県境に聳える神坂峠(現在はその下に中央道の恵那山トンネルが開通)を越え、そこから北進して飯田、伊那、岡谷を経由して松本に至る。

そこを西進して上田、佐久、碓氷峠を通過、峠を下るとほどなく上毛野国(現群馬県)へと抜ける。

ヤマトは蝦夷の民同様、皇風になびかず神出鬼没の行動をとる古東山道から目と鼻の先に居住する安曇族(穂高)とその同調者の行動を常日頃から苦々しく思っており、攻略の機会を虎視眈々と窺っていたのである。

一方、ヤマトを山中深く誘い込み、狩猟で培った罠を随所に仕掛けて、敵を翻弄するというゲリラ戦法に活路を求める安曇族は、その準備と鍛錬に余念がなかった。

だが、両者が本格的戦闘に突入するには、数十年先の八面大王の出現を待たねばならなかったのである。

海望公園に建てられたヌナカワヒメと
タケミナカタの銅像(新潟県糸魚川市)

◎建御名方命(タケミナカタ)と伊勢津彦(イセツヒコ)◎

安曇族は九州を脱出して出雲で数十年を過ごしたが、終の住処とはなりえなかった出雲を諦め北陸を経由して新天地信州へと移住(入植)した。

出雲の地は太陽神オキクルミカムイの指導の下、本拠地である筑紫(古代日本)はもちろんのこと全地球的に人類を人間の道へと覚醒させたその証左となるチプサン古墳に葬られた太陽王国の初代のキング“大国主(オオクニヌシ)、別称大穴持(オオナムチ)”と極めて関係性が深い。

また、移動ルート上の古代の高志(別名古志:コシ)の国と呼ばれた北陸地域一帯(福井・石川・富山・新潟・長野各県)も出雲に負けず劣らず大国主との関係性が深いのである。

往古、その地域は大国主の后となった“沼河比売(別命奴奈川姫=ヌナカワヒメ)”が統治していたといわれ、それを物語るかのように奴奈川姫を祀る神社や伝承、それらにまつわる遺跡などが新潟県の糸魚川市から長野県の北安曇郡にかけて多く点在している。

古事記や先代旧事本紀などの古文献は、大国主と奴奈川姫との間に建御名方富命、南方刀美神、御穂須須命との別称をもつ“建御名

方命(タケミナカタノミコト)”が誕生したと記述している。

後、祭神として諏訪大社(長野県諏訪市)に祀られた建御名方命は、諏訪大明神、お諏訪様とも呼ばれた。

出雲の『国譲り神話』に登場する建御名方命は大国主の子である八重事代主命(コトシロヌシ)の弟に当る。

古事記の国譲り神話によると、『高天原(現大韓民国慶尚北道高霊郡)の統治者であったアマテラスが子供に豊葦原の千秋長五百秋の水穂国(現日本)を統治させようと、国土譲渡の交渉権を与えた使者を数回水穂の国に送ったが彼らは復命しなかったという。

そこで天鳥船神と副官・建御雷(タケミカズチ)を水穂の国に派遣、国土譲渡の任に当たらせた。

両名は出雲国の伊耶佐(イザサ)の浜に到着、建御雷は十拳の剣(トツカノツルギ)を波の上に逆さまに差し立て、その上に胡坐をかいて座り八重事代主命に国土の譲渡を迫り、彼を屈服させて死に追いやった。

建御名方命は国土の譲渡を頑強に拒み建御雷神と力比べを行ったが抗しきれず、信濃の国の諏訪湖まで追い詰められて降伏した。

その地に留まることを条件に助命嘆願して、豊葦原の水穂国を献上した』という。

しかし、これらの記述には6世紀の“磐井抹殺事件”同様に不可解な点があり、あまりにも一方的過ぎる内容に首を傾げたくなる。

その真実はいかに！

◎『国譲り神話』の舞台は何処か？◎

では、古事記の『国譲り神話』を今一度整理すると・・・・・・・・・・・・・・・・・・

『十拳の剣が象徴する強力な武器(鉄器)で武装した天孫を偽証するヤマトの使者建御雷神が、武力を背景にして一方的に無条件での国土の譲渡を出雲で八重事代主に迫り、彼を攻略、死に至らしめた。

続いて、初代大国主より太陽王国(人間の国土)を継承した建御名方命が統治する領土へと侵攻し、同じく武力を背景として無条件での国土の譲渡を迫った。

当然のごとく建御名方命は、即座にそれを拒絶して全土に非常事態宣言を発令、臨戦態勢を敷いた。

ヤマト・神武軍の浪速(大阪地域)への上陸を撃退した生駒の族長ナガスネヒコ軍同様、建御名方命軍の武器も青銅器(銅剣・銅鉾・銅伐)や鉄器に依存するはことなく、日常生活で使用する弓矢、槍、鎌、鍬などであった。

そこでヤマトとの戦闘における圧倒的劣勢を挽回すべく地の利を生かして天然の要害を築き、ゲリラ戦術に特化した王国側のレジスタンス活動によりヤマト側にも甚大な被害を与えたが、最終的には信濃までの後退を余儀なくされ、助命嘆願を受け入れた』と推測できた。

しかしながら、ヤマトの今後の浮沈を左右するであろう総司令官建御名方命を諏訪に追い詰めておきながら、誅殺することなく助命嘆願を受け入れるという、理解し難い行動をヤマト側はとっている。

詭計を用いてマツロワヌ敵対者を惨殺するのがヤマトの常套手段であることから、建御名方命という後世の憂いとなる禍根の芽を摘み取らない筈がないのである。

つまり、古事記や先代旧事本記などの建御名方命に関する記述は、事実とはかなり相違した後世による脚色であるとの解釈ができるのである。

また、太陽王国を形成、統一した大国主の後継者である建御名方命とヤマトとの戦闘状

況を物語る『国譲り神話』の舞台は、一般的に出雲の地とされているが、何故か「日本書紀」や出雲の伝説、伝承などを記録した「出雲風土記」および「出雲国造神賀」には、『国譲り神話』に関する記述は一行たりともでてこない。

おそらくは『国譲り神話』の舞台が出雲の地ではなく、それ以外の地域であった可能性が考えられるのであった。

そこで、今一度古代の文献に目を転じたところ、出雲の『国譲り神話』を彷彿とさせ、それと極めて類似した内容を記述した『伊勢国風土記逸文』が浮上した。

主人公は伊勢国(現三重県)の国名の由来となった“伊勢津彦(イセツヒコ)”である。

同風土記逸文・国号の由来によると、『神武東征の際に神武が派遣した天日別命(アメノヒワケノミコト)が神武への国土の献上を伊勢津彦に迫るも、彼はそれを拒絶した。

だが、最終的には天日別命に討伐されそうになったので神武に国を譲り、証として八風(大風)を起こし海水を吹き上げ、それに乗じて東(常世)に去った。

ことの次第を天日別命が天皇に報告したところ、国津神の名を国名にするようにとの命が下った』という。

国津神とはヤマトに敵対した原住民側のリーダーのことである。

その敵対者の名を国号に付けるとは理解しがたく、国号に関する記述は後世の脚色であろうと推察された。

アイヌ語集(北海道豊浦町さんおん文学・刊)では、伊勢について、イセ:ise(iso.isho)＝磯(裸岩)とし、「二見ケ裏の夫婦岩の如き、裸岩の露出せる所多きより、名付けられたるもの」と説明しており、自然の地形、情景が伊勢の語源と考えられる。

後補(後世の補修)の文には『伊勢津彦の神は、近くの信濃の国に住んでいる』と記述されている。

また同国風土記逸文・伊勢の国号には、『伊賀(現伊賀市)の安志(アナシ)の 社に座す神は、出雲神(オオクニヌシ)の子出雲建子命、またの名は伊勢津彦の神、またの名を天の櫛玉命である。

この神は、昔、石で城塁を築いてここに住んでいたが、そこに阿部志彦神が来襲してきたが勝つことができずに還り去った』と記述している。

以上が古文献から抜粋した建御名方命と伊勢津彦にまつわる記述である。

両者の呼名は異なるが、これらの記述には幾つかの共通点が見受けられる。

①国譲り(武力侵略)神話

②戦闘での劣勢による科野(信濃)への後退

③オオクニヌシの子

などで、特に③はボカされ脚色された『国譲り神話』の舞台(戦闘場所)と、その年代を解明、特定する重要なポイントとなってくるのである。

①～③の共通点からは、以下の事柄が推測された。

◆建御名方命と伊勢津彦は大国主の子で同一人物、兄は事代主命。

◆生駒(奈良県・生駒市)の長髄彦(ナガスネヒコまたはトミビコ)、新城戸畔(ニキトベ：奈良県・奈良市)、居勢祝(コセハフリ：同県天理市)、猪祝(イノハフリ:同県御所市)、新城戸畔(ニキトベ:和歌山県：和歌山市)、丹敷戸畔(ニシキトベ：同県串本町)などと、侵略軍ヤマトとの激戦が示唆するように、国譲りの舞台は出雲ではなく畿内。

◆畿内における太陽王国の本拠地であり、国譲りの舞台となった最終的激戦地は、建御

名方命の居城が構築された三重県の伊勢。

◆ヤマトは建御名方命が信濃へ撤退後、その伊勢の地に己の祖先アマテラスを太陽神として祀り上げ、神社信仰の原点となる伊勢神宮を建立した。

◆神社信仰は天孫降臨と天皇(制)の正当化であり、民を精神的に呪縛し、肉体的にも奴隷化して絶対的服従を強制した。

◆『国譲り』に名を借りたヤマトの侵略戦争は、神武が九州から畿内に東征した紀元2世紀～3世紀頃の出来事である。

◆ナガスネヒコ他の原住民側の敗北により劣勢を強いられた建御名方は、体制の建て直しと軍の再教練を目的として信濃の地へと撤退した。

以上、建御名方命と伊勢津彦の『国譲り神話』の対比から、国譲りの舞台が山陰の出雲ではなく、畿内の、大阪、和歌山、奈良、三重県に関係する地域であると特定できた。

では次に、建御名方命軍はどのようなルートを辿って伊勢から信州(信濃)へと撤退したのであろうか？

また、建御名方命はその撤退先に峻嶺な山並と鬱蒼とした原生林に囲まれた信濃の地を選択している。

何故、その理由は。

これらの問題について考察してみよう。

◎撤退ルートと信州を選択した理由◎

建御名方命軍の撤退ルートを特定するのは容易なことではないが、律令制により設けられた『五畿七道(古代の行政区分または道路の名称)』以前の古東山道、古東海道、古北陸道、北陸道連絡路や伊賀路、美濃路及び古墳の分布状況や信州の地形などを参考に検討を加えると、南･北それぞれ二つの計４ルートが浮上する。

出発地点は、伊勢津彦(建御名方命)との関係性が強く指摘されている伊賀･石川の穴石(安志)神社とする。

★南ルート①【東海道、美濃路、東山道】

伊賀市(伊賀路を東進あるいは北進)→東海道へ分岐(東進)→名古屋市･熱田区で美濃路へ分岐(北進)→稲沢市、一宮市を通過して大垣市で東山道へ分岐(東進)→土岐市、中津川市を通過して最大の難所である神坂峠(別名信濃坂:頂上に積石塚の遺構在り)を越えて信濃へと入る。

麓の阿智村(北進)→諏訪湖に源を発する天竜川に沿うように飯田市、伊那市を北上して最終目的地の岡谷市・諏訪市に至る。

★南ルート②【伊賀路、古東海道、古東山道】

伊賀市(伊賀路を北進)→甲賀市→古東海道へ分岐(西進)→草津市(滋賀県)で琵琶湖の東側を北上する古東山道へ分岐、近江市、彦根市(北進)→米原市(東進)→関ケ原市→大垣市に至る。

以降、南ルート①に同じ。

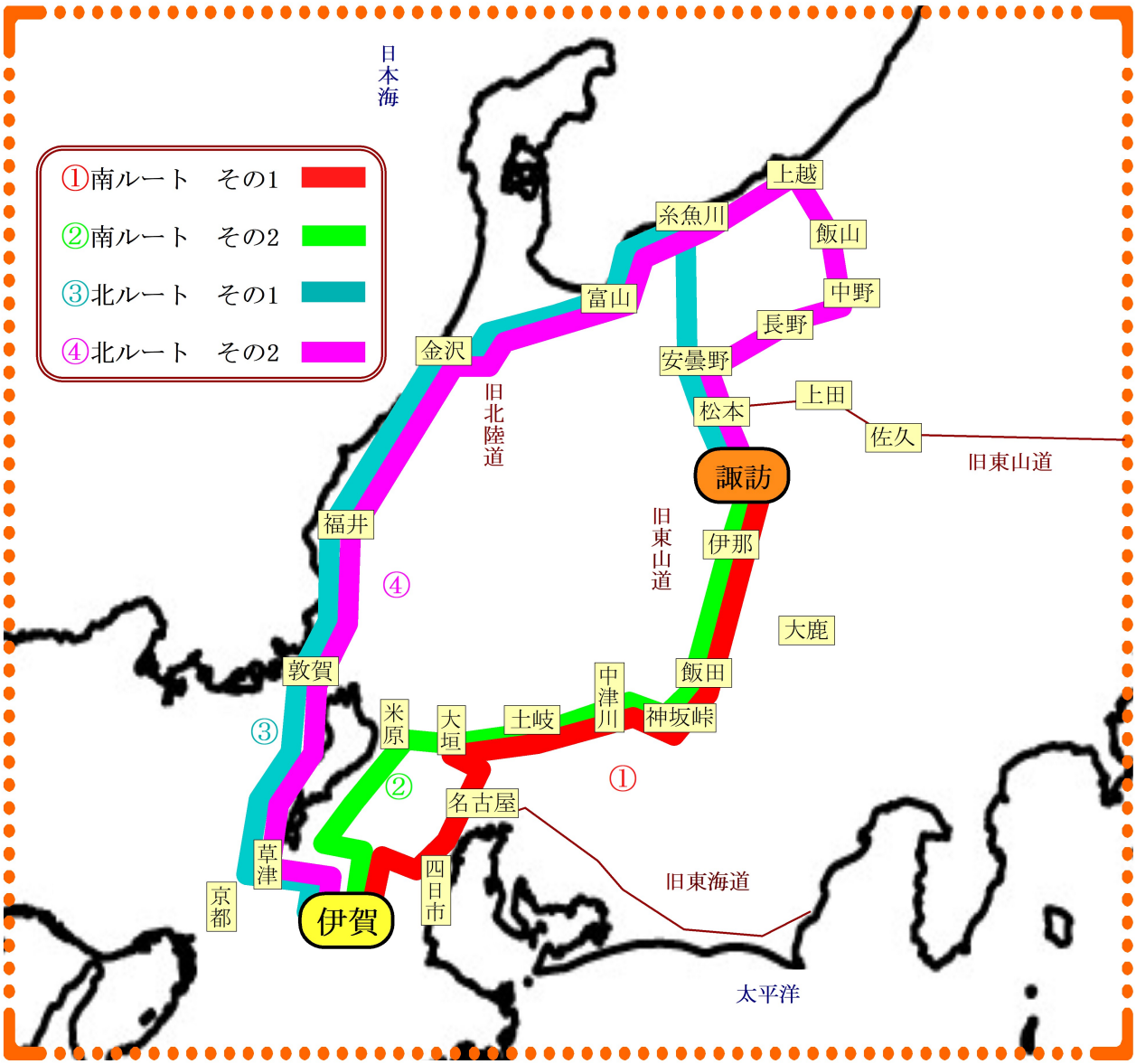
★北ルート①【伊賀路、古東海道、古北陸道
姫川に沿った塩の道】

伊賀市(伊賀路を北進)→甲賀市→古東海道へ分岐(西進)→草津市(滋賀県)→大津市(北進)で琵琶湖の西側を北上する古北陸道へ分岐、高島市→敦賀市(福井県)→福井市を通過して金沢市(石川県、東進)→富山市(富山県)→魚津市→糸魚川市(新潟県)で南進、姫川に沿って南下あるいは遡上、小谷村(長野県)→白馬村→大町市→安曇野市→松本市→塩尻市→最終目的地の岡谷市･諏訪市に至る。

★北ルート②【伊賀路、古東海道、古北陸道
北陸道連絡路、古東山道】

糸魚川市までは北ルート①に同じ。

タケミナカタ撤退ルート



糸魚川市(東進)→上越市で北陸道連絡路へ分岐(南進)→妙高市→飯山市(長野県)→中野市→須坂市→長野市→千曲市→筑北村→安曇野市に至る。

以降、北ルート①に同じ。

紀元２世紀～３世紀頃と推察される建御名方命(伊勢津彦)が活躍した時代には五畿七道は存在してはいないが、それ以前より使用されていた道(獣道、踏付け道)が整備されて七道と命名された可能性が高く、信濃への撤退には多くの間道も含めて上記の４ルートの何れかが使用されたと想定された。

対象の４ルートの中でも信濃に入るには、最短距離である伊勢→旧東海道→美濃路→旧東山道を通る南ルート①が撤退ルートとしては最も適しているようだが、鳥羽市から船を利用してゲーター祭(ニセモノの太陽円盤を叩き落す所作)で知られる神島を経由して渥美半島へと渡る「伊賀市→鳥羽市→神島→豊橋→岡崎→名古屋→美濃路」も想定された。

建御名方命(諏訪明神)の諏訪入りの状況について諏訪地方の「明神入諏神話」「諏訪大明神賀詩」には、藤の枝を手にした明神と鉄輪を手にした地主神の洩矢(モリヤ)神とが天

竜川を挟んで戦い、敗北した洩矢神が勝利者の建御名方に諏訪の統治権を譲り、モリヤは祭政(神職と政治)を司ることとなったと記述されている。

そして、建御名方命を祭神とする諏訪大社(上社)の筆頭神長官に就いたという。

神官(霊媒師)とは、宇宙(太陽神)とのコンタクトが途切れているにも拘わらず、あたかもコンタクトが正常に行われているかの如く装う似非(エセ)コンタクトマンのことで、神官のコンタクトの相手は反宇宙分子(サターンの眷属である邪霊、動物霊)などである。

587年、聖徳太子・蘇我氏(馬子)連合軍と物部氏(守矢)が覇権を争った「丁未の乱」が発生した。

守矢は敗北したが、守矢の次男である武磨が諏訪に逃亡、モリヤと縁戚になり代々神長官の位に就いたと言われている。

しかし、神社の創建や神社信仰はヤマトの先住民族制圧後に登場してくるものであることから、紀元2世紀～3世紀ころの建御名方命の時代には諏訪神社(現諏訪大社)は存在するべくもなく、もちろんモリヤが神長官に就任することなどあり得ない話である。

ヤマトが信濃を攻略したのは７世紀～８世紀ころであるから、モリヤ(守矢)の伝承は建御名方命とは関係性が薄く、統治権を譲り「祭政」を司ったとの話は己を権威付けるための後世の創作に過ぎないのではないか。

建御名方命を祭神とする徳島県名西郡石井町の『多祁御奈刀弥(タケミナトミ)神社』の社伝には、“信濃諏訪郡の南方刀美神社(現諏訪大社)は、多祁御奈刀弥神社から宝亀10年(779年)に移遷された”との記述がある。

何れにしてもヤマトの信濃への侵略が7世紀～8世紀頃を遡るものではなく、諏訪大社の創建もそのころであることから、建御名方命とモリヤとは年代的にも関係がなかったことは明白なのである。

また「明神入諏神話」「諏訪大明神賀詩」などには、建御名方命の諏訪入りルートを特定する記述は見当たらないが、それを示唆する他の資料が存在するのでそれを紹介する。

★北ルート

“建御名方命は旧糸魚川(姫川)を遡り、小谷、白馬を経由して鬼無村(ギナシムラ:現長野市鬼無村地区)で西進、善光寺平を経由して千曲川を遡り(南下)山越へ、古代の安曇野の辺りは諏訪湖にも匹敵する湖であったため塩尻付近まで舟で通過して諏訪入りした”(お諏訪さまより)。

“建御名方命は出雲の美保から逃れ能登半島の入り口石川県羽咋市の南隣、志雄町付近に後退、さらに舟で日本海を北上し、越後(現新潟県)から信濃川沿いに内陸に入り、長岡市→長野→上田→武石峠→松本→塩尻を経由

★建御名方命の伝承★

大鹿村鹿塩字梨原鎮座諏訪神社祭神ハ建御名方命ニシテ、其ノ創建遼遠ニ渉リ詳ラカナラズト雖モ、太古大国主命ノ御子ニ二子アリ、長子事代主命ハ天津神ノ勅ヲ奉ズレドモ、独リ建御名方ノ命ハ勅ヲ奉ゼズシテ天使の二神ト大ニ戦ヒ逃レテ州羽国ニ至リ、今ノ下伊那群佐原ニ於テ和ヲ講ジ(御手形石ノ古跡アリ)、夫レヨリ命鹿塩ニ入リ葦原(今転化シテ梨原ト云ウ)ニ行宮ヲ建テ暫ク山野ニ御狩ヲナサレ山塩ヲ発見シテ自ラ捕獲セラレシ鹿肉ノ調理ニ用ユ、故ニ地名ヲ鹿塩村ト号ス、而シテ今諏訪ニ御遷居在セラレタル霊跡ニシテ、今本殿ノ下ニ八シャク四方位ノ塚アリ御分霊ノオサマリマス所ナリト云フ、後人是ヲ尊崇シ一社ヲ創立して勧請ス。

依是古来諏訪大社ノ御柱祭ニハ、大祝ニテハ幕ヲ張リ鹿塩桟敷ヲ設ケ特ニ待遇セラレシオ以テ、当方ニテハ惣大ヲ以テ饌別ヲ供シ参拝セシ例ナリキ、古クヨリ社前ノ額書ニ諏訪本社ト画レタリ　(梨原家文書)

古墳の分布が示す防衛ライン

して諏訪入りした”（出雲族の関東への移動より）。

“上田市･生島足島神社によると、「神代の昔、建御名方命の神が信濃川を遡り、諏訪へ逃れようとして、この地に滞在した時、地元の人々が米粥を煮て献上した」という。

その故事に因んだ御籠祭が継承されている（生島足島神社の社伝より）。

“糸魚川市の姫川を遡り小谷、白馬を経てそのまま南下せず、長野市鬼無し地区から善光寺平へと抜け、千曲川を遡り山越をして諏訪に入った。

以前建御名方命の城が建っていた場所に善光寺が建てられた”（善光寺平の伝承より）。

★南ルート

“大己貴神（大国主）が国造りにいそしまれた

頃に子の事代主命と建御名方神を従えて立ち寄った”（辰野町弥彦神社の社伝より）。

“昔、建御名方神は戦に破れて神稲村の佐原（現下伊那郡豊丘村）に逃れその後鹿塩（現大鹿村）に隠れて住居を定め、毎日山へ狩にでた。

ある日、命（ミコト）は谷間に塩水が湧き出るのを見つけ、獲物の鹿をこの塩水で調理してしばらくここに暮らしていた。

鹿塩の名はそれから始まった名で、その当時の芦原を今では梨原と呼んでいる”（岩崎清美「伝説の下伊那」より）。

“建御名方神は住民が塩不足で困っている時、山中に入り塩の吹き出る場所を探し人々に教えてくれた。それが現在の大鹿村の「鹿塩の湯」である”。

“鹿塩の地で天孫（ヤマト）を迎え撃った”。

“天孫軍と戦ったタケミナカタは講和を結んだ後まずこの地に行宮を構えた。

そんなある日、鹿の威容に群れ動く姿を見て七カ所の塩泉を発見した”（大鹿村の伝承より）。

何れにしても建御名方命は信濃（長野県）にかなり土地勘があるとの見方ができ、母である奴奈川姫が信濃を含む北陸一帯を統治していたことと、建御名方命の生まれ故郷であることからもそれは頷けるのである。

建御名方命が最後の拠り所として後退した信濃には、少彦名命神と大国主の国造りの功業から太陽王国が誕生していたのに加えて、奴奈川姫傘下の精鋭部隊としての王国軍が未だ健在であったはずである。

建御名方命はこれらを十分に考慮したうえで再起を図りヤマトの東国への侵攻を阻止すべく、高山という天然の要害に守られた信濃の地を選んで後退したのである。

・かつての父母の統治地域

積石塚の可能性が指摘されている縄文、弥生、古墳、平安、中世の複合遺跡である根塚遺跡の全景（長野県下高井群木島村往郷）

・自分の生まれ故郷で土地勘がある

・王国軍の健在性

・防御に優れている

などが決め手となり建御名方命は信濃の地を選択したのであった。

大鹿村の伝承などを参考にすると後退のルートは、どちらかというと北ルートよりも最短ルートと目される南ルートに有意性が見られるようだ。

では、建御名方命を盟主と仰いだ信州・信濃の歴代の首長達は、ヤマトの侵攻に備えて如何なる防衛措置を講じていたのか、古墳の分布状況から推測して見よう。

◎古墳の分布状況が物語る防衛ライン◎

長野県内には善光寺・松本・佐久・伊那の4つの盆地があり、それぞれ北信地方（中野・飯山・長野地域）、中信地方（大町・安曇野・松本地域）、東信地方（上田・佐久地域）、南信地方（諏訪・伊那・飯田地域）に区分けされて独自の地域圏を形成している。

県内には総数2,831基の古墳（含む横穴墓）が分布する。

内訳は北信953基、中信302基、東信532基、南信1,044基であるが、全体の約70％が北信

古墳状に築造された根塚遺跡中腹には、祭祀跡と推察される石畳とその両脇に石柱が立っている。

根塚遺跡からは京都府八幡のヒル塚古墳に次いで国内2例目となる太陽王国の所産である渦巻文を装飾(柄先端2ヶ所と柄部分)した鉄剣が出土した。同遺跡と八面大王の関係者が一時期身を寄せた岩井集落は僅か4kmの圏内に存在している。

と南信に集中している。

太陽神とのコンタクトから開花した宇宙文化の所産である古代遺跡(古墳・神籠石・積石塚・鹿石【ヘルスクル】・環状列石【ストンサークル】)に装飾されたピクチャとしての太陽円盤マーク(円紋・多重円紋・渦巻紋・蕨手紋・直弧紋・三角紋・有翼・太陽の舟・車輪など)や渦巻文装飾付鉄剣、蕨手刀などが存在することは、前号の「魏石八面大王の実像No.1」でも解説したが、これらの遺物の一つである積石塚に至っては、全国(約1,500～2,000基)の5割前後に相当する約900基がここ長野県で築造されている。

また、県内での蕨手刀の出土数は17本と岩手県、北海道に次いで多く、積石塚の可能性が強く指摘されている木島平村・根塚遺跡からは国内2例目の渦巻文装飾付鉄剣が出土している。

隣県の山梨に至っては、県内の古墳総数516基の約4割に相当する200(現存146)基を擁した横根・桜井積石塚群が存在する。

また、群馬県と埼玉県でも積石塚数基が確認されている。

山梨の古文献では積石塚を通常の土盛り古墳とは区別して『火之雨塚』との表現が用いられ、積石塚と宇宙(ＵＦＯ)との関係性が強く指摘され大変興味深い。

953基の古墳が分布する北信地方(長野、中野、飯山地区)では、3世紀中頃より古墳の築造が始まり、善光寺平(長野盆地)では4世紀後半から前方後円墳が出現する。

しかし、その前方後円墳の築造も5世紀後半には終了し、それに取って代わるかのように長野市とその北の飯山市には古墳群が出現する。

大室古墳群の8世紀初頭の最終築造期を除くと、他の地域の古墳群の築造はほぼ7世紀中頃で終了する。

北信地方の古墳の特色としては、全国的にも数が少なく築造地域も限られている積石塚古墳の存在である。

長野県内約900基の積石塚のほぼ9割以上が北信地方に集中する。

中でも505基の規模を誇る大室古墳群(長野市松代町大室)の約8割(400基)以上が積石塚古墳で全国最大規模を誇り、残りの約100基は土石混合墳と盛土墳である。

大室古墳群における積石塚古墳の集中度合いは他の地域を圧倒している。

積石塚のほとんどは横穴式石室であるが、全国的にも約50例の報告しかない「合掌形石室」の39例がここ大室に存在し、異例ずくめ

5世紀前半の前方後円墳を最古とする全国最大規模の大室古墳群（長野県長野市松代町）

235号墳

241号墳

23号墳

168号墳

全国的にも発見例が少ない巨石を八の字に組み合わせた合掌型石室。7割以上が大室古墳群に存在する。

33号墳

168号墳拡大

31号墳

大室古墳群の25号墳から出土した土器片、類似文様の土器片は南信の漆垣遺跡、見島ジーコンボ古墳群【積石塚】からも出土した

漆垣外遺跡・出土遺物

見島ジーコンボ古墳群
第152号墳出土土器

の古墳群でもある。

大室古墳群の第25号墳積石塚から出土した遺物の一つである土器表面には、後北式土器の影響を受けたと推察される太陽マークとしての多数の円紋が装飾されている。

北信地方では上水内郡から1本の蕨手刀が出土している。

北東アジアから宇宙へ指向する後北式土器と積石塚文化の担い手であるモンゴル・ツングース系語族に象徴されるC2型遺伝子を持つ少数民族の日本列島への渡来と、その存在がクローズアップされたのである。

中信地方には302基の古墳が大北(大町市とその周辺)、安曇平(安曇市と松川村)、松本平(松本市とその周辺)の各地区に分布する。

県内4地方の中では古墳の総数は最も少ないが、古墳の築造は県内では最も早く松本平では3世紀後半には前方後方墳・方墳が出現する。

中信地方の古墳の特色は円墳が主流で前方後円墳は現時点では発見されていない。

古墳の約7割が松本平(松本盆地)の松本市内に集中し、中信を代表する約80基の中山古墳群の構築が6世紀中頃より始まる。

松本市内には中信地方には数少ない積石塚である古墳時代後期以降(5世紀後半～7世紀後半)に築造された針塚古墳が存在し、同古墳の周辺には現在は開墾などで破壊されてしまっているが、10基前後の積石塚が点在していたとの報告がなされている。

また6世紀後半より国内最古と目される上原ストンサークルを擁する大町地区の小熊山東南麓と安曇平でも古墳の築造が始まる。

安曇平に築造された約87基以上に及ぶ穂高古墳群がヤマトの侵略から九州を脱出し、穂高(現安曇野)の地に入植した磐井・安曇一族の古墳であることは前述したが、何故に彼らが北信でも、南信でも、東信でもない決して肥沃な土地とはいえない安曇野の地を選択しなければならなかったのか謎が残る。

ヤマトの信州への侵略行動と無縁ではないことは明らかなのである。

河川の修復などで破壊されなければ100基を超えるとも推量された穂高古墳群での積石塚の存在は「その可能性は十分にありうる」との専門家の指摘である。

中信地方における中山、小熊山東南麓、穂高の各古墳群の構築は8世紀前後を境として終了した。

中信地方では松本から1本の蕨手刀が出土している。

東信地方(上田市・佐久市)の両地区には約532基の古墳が分布する。

東信地方の古墳の特色は、4世紀後半に上田地区で方墳の築造が始まるが、5世紀後半以降、方墳に代わり帆立貝式前方後円墳や一般的前方後円墳が構築され、6世紀中頃にはそれが終了する。

長野県内唯一の太陽マークが発見された
神宮寺古墳（長野県上田市下室賀）

東側壁の奥壁際の基礎に用いられた巨石の
中央部分に装飾された同心円紋

一方、佐久地区では上田地区での古墳の築造が終了した6世紀後半より、円墳の築造が始まるがそれも7世紀後半で終了する。

特質すべきは上田市下室賀の三つ頭山腹に築造された神宮寺古墳の側壁に彫られた円文（または二重円文）である。

同古墳は山腹の一部を削ったテラス状の大地にあり、約17度の傾斜地に盛土によって築造された古墳時代後期（5世紀後半～6世紀後半）の帆立貝状円墳である。

報告されている限りでは長野県内唯一の円文スタイルの太陽マークが、ここ東信地方の上田地区に存在している。

東信地方では上田から2本、佐久から5本の計7本の蕨手刀が出土している。

隣県の群馬県から9本、埼玉県からも１本出土している。

8世紀頃にヤマトの国府が置かれ、陸奥国のエミシ（蝦夷）征伐のために整備された官道（五畿七道の一つ）である東山道（古代近江国～陸奥国）の信濃における要衝の地、そこが上田であった。

南信地方（諏訪・伊那・飯田）の各地区には北信地区を上回る1,044基の古墳が分布する。

長野県内全体の約4割（37%）の古墳が天竜川に沿って、主に南北約100kmに伸びる伊那谷（伊那盆地）の南部である下伊那郡に存在する。

なかでも長野県の南の玄関口といえる飯田市内に約700基以上が築造され、その周辺町村の古墳約180基と合わせると南信地方全体の約84%を占めている。

南信地方の古墳の特色としては、5世紀後半に北信地区で衰退をみせる前方後円墳の築造が、北信地方と入れ替わるかのように同地方で始まり、県内全体の約半数に相当する24基が飯田市内（23基と喬村1基）などに集中する。

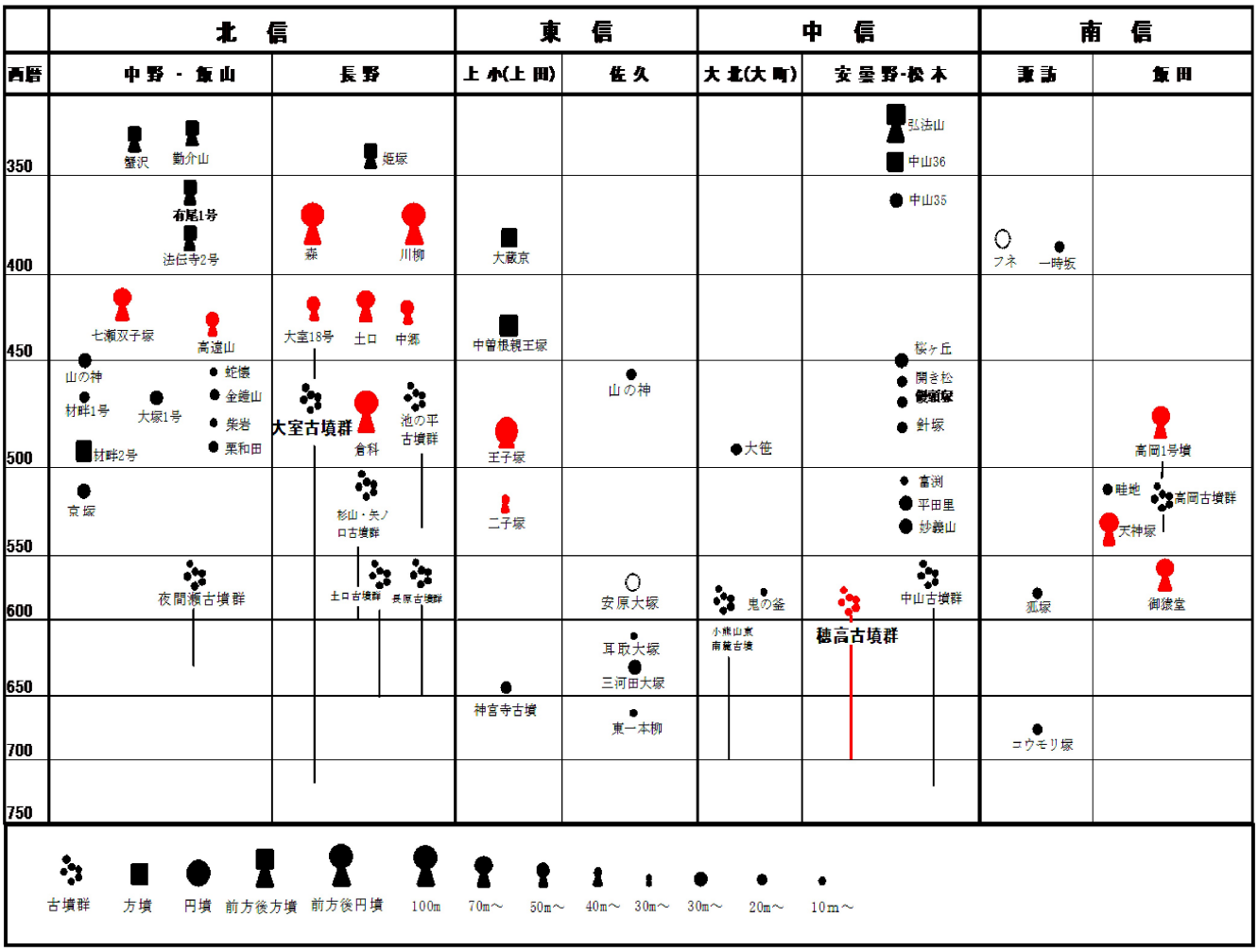
飯田市を中心とする下伊那地域では5世紀後半から6世紀初頭以降に横穴石室（九州式）をもつ前方後円墳が、県内ではいち早く築造されるが6世紀中頃には終焉をむかえ、6世紀初頭からは群集墓が出現する。

また5世紀後半以降、下伊那地方の古墳から多数の甲冑（かっちゅう）や馬具が副葬品として出土している。

飯田市教育委員会はその報告書の中で「非常に軍事的性格の強い集団が、畿内政権との関わりの中で当地方に形成された可能性が強いのではないかと」と指摘している。

特筆すべきは飯田市上郷の“溝口の塚古墳（前方後円墳・全長約48ｍ）”から「直弧文」を施した鉄剣の柄や鞘尻に装着する長方形の鹿角製装具が出土し、同市妙前大塚古墳と寺所遺跡からも直弧文を施した類似の装具が出

長野県の主要古墳



土したことである。

さらに同市新井原2号古墳からも直弧文と鹿を線刻した埴輪片も見つかっている。

因みに大陸の北方系少数民族は、鹿と太陽神にまつわる伝承を有し、鹿をトーテム(太陽円盤)としている(本誌2016/11 VOL33-1号参照)。

石人山古墳の石棺に刻まれた直弧文と円文。九州では日輪寺、井寺。国越、長砂連古墳などの石室（石棺）などに直弧文が顕著に認められる。

太陽マークの一つである直弧文は、北部九州(福岡県･熊本県)の太陽王国系の歴代の首長墓である前方後円墳の石室や石棺に顕著に認められる。

また夜間尾流を伴ったＵＦＯの飛翔スタイルと前方後円墳のスタイルとが非常に酷似していることから、それが前方後円墳築造のモデルとなった可能性が極めて高い。

南信地方には存在していないと考えられていた古墳時代中期(4世紀後半～5世紀後半)の積石塚3基が、2014年～2016年にかけて実施された飯田市北方の「北方西の原辻遺跡」の発掘調査で確認された。

一方、伊勢から後退した建御名方命の本拠

5世紀中ごろの原住民系と推定される日本最大〔全長486m〕の大仙古墳〔伝仁徳陵〕と複数の陪塚（大阪府堺市堺区大仙町）

地と伝承されている諏訪地域(諏訪市･岡谷市･茅野市)にも多数の古墳が分布している。

諏訪では5世紀後半～7世紀中頃までに52基が、岡谷でも6世紀前半～7世紀後半までに24基が、茅野では約50基の古墳が築造された。

特色としては主体となっている横穴式石室の円墳の他に前方後円墳が1～2基と、10基未満の横穴墓の所在である。

諏訪市の大和遺跡と漆垣外遺跡からは同心円文が刻まれた須恵器(古墳時代後期)の出土が報告された。

一見すると大室古墳群の第25号墳より出土の土器片に施された太陽マークとの類似が指摘される。

南信地方では上伊那から3本、諏訪から5本の計8本の蕨手刀が出土している。

以上、長野県内における各地方の遺跡(古墳など)の分布状況や特徴、及び太陽王国の所産と深く関係する遺跡の出土物(蕨手刀･渦巻装飾鉄剣･土器片)などについて述べた。

これらを総合的に勘案すると既に推察していた王国の存在が裏付けられたばかりか、古墳の分布状況からは以下の事柄が推定されたのである。

★信州の防衛拠点(4世紀前半～5世紀後半)

･北信地方は中野･飯山･長野、中信地方は松本･諏訪、東信地方は上田。

･防衛の主力部隊は北信地方、長野が本拠。

★信州の防衛拠点(5世紀中頃～6世紀中頃)

･防衛の主力部隊が北信地方から南信地方へ移動、飯田が本拠。

★ヤマトが南信地方の飯田の防衛ラインを突破(6世紀中頃～6世紀後半)

･飯田の防衛本隊、諏訪･松本へと撤退。

･ヤマトの侵攻に伴って王国の勢力が分断され、信州を統合する首長が不在となる。

･非人間的物質文明が拡大する。

･ほぼ同時期安曇族が九州より安曇野とその周辺へ移住、その地に王国の本拠(宮城)を定めてヤマトの北上に備える。

★ヤマト、南信地方の諏訪を迂回して中信地方の松本に迫る(6世紀後半～8世紀初頭)

･北信の大室、中信の大町、安曇野(穂高)、松本(中山)の在地勢力は健在。

★ヤマト、安曇野･大町を除き信州をほぼ平定する(8世紀初頭～8世紀後半)

･信濃で神社･仏閣の建立が始まる。

･東山道の要衝である松本・上田を経由した奥州のエミシ(アテルイ)討伐の本格化。

･ヤマト奥州の遠征に必要な軍需物資(武器、食料、労力など)の強制的供出を敢行。

･八面大王を総指揮官とする安曇･大町地区の首長たちの一斉蜂起、数千名のヤマト軍との全面戦争となる。

･投降(和議)を名目としたヤマト側の詭計工作により八面大王（八女大君）以下幹部136名斬首となる。

★エミシとの戦闘で幾度となく敗北を喫していたヤマトが詭計を用いてアテルイとモレ(副将)を京の都に伴う(9世紀初頭)

･ヤマトはアテルイとの約束事を反故にして両名を河内国(現枚方市)にて斬首に処す。

以上、ヤマトの侵攻状況に即応する形で信

州各所に築造された防衛ラインを古墳の分布状況から推測した。

大国主、建御名方命、そして歴代の首長たちが営々と築いてきた信州の太陽王国も、八面大王の武装蜂起を最後として終止符を打つこととなったのである。

◎オオナムチ(オオクニヌシ)とオロチ語◎

建御名方命の父にして古代の北陸や信州のみならず、少彦名命神(オキクルミカムイ)の援助を受けて国造り(人間性の復活＝人間国土の建設)という偉業を成し遂げた大国主(チプサンキング、イニシャルNo.13)のまたの名は大己貴神(オオナムチ)であるが、その名の意味するところは不明であった。

しかし、2003年日本の異色の古代史家F氏がC2の遺伝子を持つ沿海州一帯の少数民族の一つであるオロチ族の村を訪れ、その交流の中で“オオナムチ”に関した新たな事実を長老よりもたらされている。

元々オロチ族はアムール川(黒竜江)の上流域に居住していたが漢族に追われて北東ロシアの日本海側(樺太＝サハリンの対岸)である沿海州への移動を余儀なくされている。

その長老曰く、『オロチ語でオオナムチはオとナとムとチに分けることができる。

オオは「海」、ナは「大地」、ムは「主(ヌシ)たる」、そしてオオナムチの「チ」或いはオロチの「チ」は神様を意味している』と、長老は驚くべき内容をF氏に告げたのである。

これらを直訳すると、「海と大地の主たる神様」となり、海と大地は遊星地球を示唆していると推察されることから『地球に開花した太陽王国の偉大な統率者(キング)である神の如き存在』と解釈できるのである。

オオナムチがオロチ語であったとは想像だにしないことであった。

世界の太陽王国の本拠地たりし九州熊本県の山鹿には、初代大国主のチプサンキングを被葬者とした世界遺産に匹敵、あるいは宇宙遺産と呼んでも過言ではないチプサンまたは

世界の各地域に太陽王国を樹立せしめ、それを統一したチプサンキングの偉大な功業を祝し、慶賀に訪れた7機の太陽円盤とそれを歓喜して迎えるキングを古墳の石室に表現している。(熊本県山鹿市)

網走市観光協会が主催する北方系先住民族の先人の慰霊と豊穣を祈願した「オロチョンの火祭り」（北海道網走市）

チュプサン古墳が存在している。

チプサンとはアイヌ語で“舟あるいは太陽が降下する”の意味をもつ。

同古墳内部の壁画には、7機の太陽円盤（ＵＦＯ）を迎えるチプサンキングが、かつてあまた地上に存在せし太陽王国のキング・オブ・キングスであつたことを示唆する極めて重要な装飾が施されている。

マヤの古文献「ポポルブフ」は、当時の人々が『13と呼ばれた人が住む国をはるばる船で訪れていた』と記述し、古代エジプトでは東方の神国を『日出ずる国』と呼んでいたのである。

他方日本から隣国中国に送られた古代の書簡には、『日出るところの天子』の館からは阿蘇山が望めるとの記述が見受けられる。

オオナムチがオロチ語で解釈可能である以上、大国主とオロチ族の間にはそれ相当のコンタクトがあったはずで、そのコンタクト故にオロチ族が大陸から日本へ渡来したとの見方が一般的であろう。

日本人のＤＮＡに少数ながらＣ2の遺伝子が認められるのもそれを裏付けている。

北海道網走市の恒例行事である「オロチョンの火祭り」はモヨロ貝塚人（現呼称オホーツク人）に由来している。

彼らのルーツは沿海州からアムール、バイカル湖一帯の北東アジアの北方系民族に求められる。

その民族の一つであるウィルタをアイヌは「オローチ」「オロチョン」「オロッコ」と呼んでいた時期がある。

オロチョンとはバイカル湖畔を生活舞台とする一民族の呼称であるが、一般的にはアジア地域の北方系民族を総称する言葉として使用されており、主にアムール川流域に居住していた人々の呼称であった。

中国領内の内モンゴル自治区に住む「オロチョン族」とロシア領内の「オロチ族」とは同一の民族とされ、約2,000年前石狩低地帯の余市及び江別に北日本（含む樺太・千島列島）、東日本を席巻した後北式文化の担い手である人々が渡来しているが、彼らはオロチ族を主体とした北方系民族なのであった。

◎ヤマタノオロチ神話とオロチ族◎

オロチと言えばまず日本の神話（古事記・日本書紀・風土記など）に登場する“八岐大蛇（ヤマタノオロチ）が想起され、スサノオに退治された伝説的生物である。

記紀の記述を要約すると「姉であるアマテラスが住んでいた高天原（タカマガハラ）を追放されたスサノオが、出雲において毎年うら若き娘を人身御供として差し出すことを老夫婦に要求していた大蛇（オロチ）の存在を知り、老夫婦の娘であるクシナダヒメとの婚姻を条件にオロチ退治を引き受ける。

スサノオは老夫婦に強い酒（八塩折之酒）を造らせ、それをオロチに飲ませて酔い潰れている隙にオロチを切り刻み、尾（体内）から出てきた不思議な剣（神剣）をアマテラスに献上し、クシナダ姫と結ばれた」という内容だ。

興味深いのはオロチの胎内から発見された

とされる神剣である。

この剣には幾つかの謂れがあり、その謂れによって天叢雲剣(アマノムラクモノツルギ)、都牟刈太刀(ツムガリノツルギ)、草薙剣（クサナギノツルギ）と呼称されている。

いずれにしても爬虫類のオロチが剣を体内に隠し持つなど論外の話であるが、この剣は天(宇宙)との強い結び付きを感じさせる。

このオロチ退治の状況と、ヤマトが古代から近代までの太陽王国側(原住民側)との幾多の和議における酒席において、強い酒で相手を酔わせてその隙をついて惨殺するという常套手段としての詭計とが、驚くほど似かよっていることに気付かされる。

記紀の記述ではオロチを悪者、スサノオを英雄として扱っているが、その内容などは俄かには信じ難く、同じヤマタノオロチ神話ではあるが、古事記と日本書紀とでは何故か相違点が多く、それらを拾い出して検証した。

・スサノオが降った地

日本書紀一書第二【安芸国の可愛の川上(現広島県安芸高田市吉田町)】

古事記【出雲国肥の川上の鳥髪(現島根県と鳥取県の県境の船通山付近)

・スサノオの表記

日本書紀(素戔嗚尊)

古事記(速須佐之男命)

・スサノオの剣(オロチを殺害した剣)

日本書紀(十握剣＝トツカノツルギ)

書紀の一書曰(蛇剣・蛇之麁正・蛇韓鋤之剣)

古事記(十拳剣＝トツカノツルギ)

・オロチが所有していた剣

日本書紀(草薙剣または倶娑那伎能都留伎)

書紀の一書曰(本当の名は天叢雲剣)

古事記(都牟刈之大刀・後に草那芸藝之大刀と改名)

・ヤマタノオロチの表記

日本書紀(八岐大蛇) 古事記(八俣遠呂智)

・ヤマタノオロチの所在地

日本書紀(特定地なし)

古事記【高志国＝古志国(現北陸地方・含む新潟)】

・クシナダヒメの表記

日本書紀(奇稲田姫) 古事記(櫛名田比賣)

同じ歴史書でもここまで漢字での表記や名称が異なると、その信憑性はかなり薄れてくるのではないだろうか。

また古事記を参照すると、高志のヤマタノオロチが毎年やって来ると前置きし、その姿形について、「彼の目は赤カガチ(赤いホオズキ)のようで、体が一つに頭と尾が八つ、体には苔や檜(ヒノキ)、杉(スギ)が生え、その長さは八つの丘、八つの谷にわたり、腹は常に血で濡れただれている」と記述している。

だが、このような荒唐無稽の大蛇が存在しないことは誰にでも分かることである。

日本書紀よりも8年も前に編纂された古事記では大蛇ではなく遠呂智(オロチ)との記述がなされている。

しかも、この三文字は音を漢字で表記したとの注釈が付けられていることから、**オロチ**が即ち大蛇とは限らないのである。

書紀では「強い酒を造り、それを八つの桟敷(一段高い仮設の席)に用意した八つの酒舟に盛り、オロチはその酒を飲んで寝てしまった」という。

酒を好み、神剣ともよばれた特殊な剣を所有したオロチには人間的要素が強く感じられる。

また書紀には、一説に曰く(ある言い伝えによると)として“剣を所有するオロチの頭上には常に叢雲(ムラクモ)が出現していた”との記述がある。

またオオクニヌシとの接点を持つ新潟県(旧

古志)の出雲崎の地名は、オオクニヌシの頭上に常に叢雲(ムラクモ)が出現していたことに由来しているのである。

オオクニヌシの国造り(人間国土の建設)の協力者である少彦名命神(オキクルミカムイ)の搭乗機が、天乃羅摩船(アメノカガミノフネ)、或いはアイヌの聖典やユーカラに記述されたシンタ(小型の宇宙船)であることを考慮すると、頭上の叢雲がシンタと同一の物体であると認識できるのである。

この叢雲の表現からは、40年間荒野を行軍したイスラエルの民の頭上にあって、前後左右から民をガード、先導した“白き雲”“濃き雲”“火の柱”とバイブルに表現されたシェキナ(ＵＦＯ＝宇宙母船)が想起される。

シェキナはアイヌ語で「ガマの穂」を意味し、その形は細長い円柱形であり、鯨のような紡錘形状をシェキナと呼んでいたのである。

記紀の記述からはオロチに関して次のことが読みとれたのである。

・オロチは大蛇ではなく人間の集団。
・オロチ事件の舞台は出雲ではなく古志。
・オロチの勢力圏は古志(北陸･信越地域)
・オロチ族の主だった地域首長は８名。
・スサノオの詭計にはまり８名の首長が惨殺された。
・宇宙より承認の王権のシンボルである叢雲の大刀(剣)をスサノオに奪われる。
・後世において叢雲の剣を偽った草薙の剣が、天皇の皇位の継承の璽しとされる三種の神器の一つとなる。
・オロチの正体は約２千年前に太陽王国の防衛で北海道に渡来、その後南下したオロチ族(含む他の北方系民族)である。
・ヤマトとの戦闘に敗れたオロチ族は各地に離散した。

オロチを山の神とする伊吹山（1.337m）

滋賀県と岐阜県の県境に位置する伊吹山はオロチと関係が深く、東西の山麓には西側に伊夫岐神社(滋賀県米原市伊吹)、東側に伊富岐神社(岐阜県垂井町岩手)がそれぞれ建立され、伊吹大明神は“八俣大蛇”の神格化であるとして神社に祀られている。

伝承によると『この地にスサノオに害された八俣大蛇が天降り、毒蛇となりて不破関の大路を防いだ。

景行天皇の皇子ヤマトタケルがエミシ遠征の帰路、ここで伊吹大明神の八俣大蛇と戦い傷を負った。

それが致命傷となってヤマトタケルは亡くなった』と、古事記及び伊福貴神社縁起などに記述されている。

スサノオにとって“日いずる処の国”である太陽王国の侵略には、はるばる大海を渡ってその防衛の任に当っていたオロチ族が邪魔者であったことは言うまでもなく、彼らを奇怪な大蛇に仕立て上げ悪者にすることで侵略行為を救済行為という美談にすり替え、真逆の出来事を正史とする記紀に真実を歪曲して記述したのである。

察するに、族長が所有していた王権のシンボルである神剣の強奪がオロチ族を惨殺した真の目的であったのではないだろうか。

天孫(太陽神の末裔)を偽証する天皇の正当化と絶対的王権の地位を確保するには、その

ヤマタノオロチを祭神とする伊富岐神社
（岐阜県垂井町）

象徴である神剣はヤマトにとって必要不可欠の存在であったに相違ない。

古代の太陽王国への武力侵略しかり、偽りの神剣（草薙剣）を所有する天皇（制）が引き起こした太平洋戦争しかり、国内外400万人以上の生命が犠牲となったのである。

戦後70年が過ぎた今日でも日本軍や連合軍を代表した米軍の非人間的行為により発生した数々の残虐行為・強制労働・慰安婦・原爆被害・沖縄の基地問題などは未だに解決の糸口は見えず、国際問題化している。

では、次に詭計を用いてオロチ族に大打撃を与えたスサノオの素性を探って見よう。

◎スサノオとヤマトのルーツを探る◎

北朝鮮の北部地域やその周辺の民族にはフツ、フツシ、フル、ウガ、ミククルなどの名前が多く見受けられるようだ。

「古代日本正史」を参考にすると、スサノオの父の本名はフツ（イザナギ）、スサノオはフツシという。

そして神武の太陽王国の侵略に果敢に抵抗したナガスネヒコ（原住民）に反逆し、神武側に寝返り王国側に大打撃を与えたニギハヤヒの名はフルである。

ここで、この問題と深くリンクする朝鮮半島の百済（ペクチェ＝クダラ）と布流（フル）の建国について要点を述べてみたい。

朝鮮半島の高句麗の建国者チュモン（扶余国の王族）にはユリとフル（ビリュ）、オンジュ（オンソ）という三人の子がいたが、ユリ以外は高句麗の国母と呼ばれたソルボン五部族のケルブ族の出身であるソソノの連れ子であった。

後継者問題からソソノは子供二人と家臣や五部族を伴って高句麗を去り、新天地を求めて半島を南下した。

弟のオンジュが選んだ土地は肥沃で収穫にも恵まれ国は栄え発展した。

オンジェは彼に従った家臣10名に因んでその土地を「十済」と命名した。

一方、兄のフルが選んだ土地は塩気が多くて努力しても生産性が上がらず、国は貧しかった。

悲観したフル王は家族、家臣を残して非業の死を遂げた、或いは日本へ渡ったとも伝承されている。

最終的にはフル王国は滅亡し、残された王族、家臣と多くの農民（百姓）は弟のオンジュの下へ身を寄せた。

オンジェの国は人口が増えたので国名を「十済」から「百済」に変更したという。

660年、この百済は唐・新羅の連合軍と戦って敗北、滅亡した。

663年、倭国（日本）は百済再興軍として3万7千名の援軍を送るも、唐・新羅連合軍に白村江の戦いで大敗を喫した。

百済からは王族関係者他数千名が倭国に亡命、帰化して様々な要職に登用され、ヤマト朝廷に貢献した。

また、既に滅亡したフル王国の王族の移住地は百済だけにとどまらず、半島の他の地域にも及んでいた。

一方、岡山県赤磐市にはスサノオを祭神と

する石上布都御魂(イソノカミフツミタマ)神社があり、オロチを惨殺した十拳剣がここに奉納されていたが、後に奈良県天理市布留町の石上神宮に移管された。

その石上神宮の主祭神は布都御魂大神(フツノミタマオオカミ)、そして配神が布都斯御魂大神(フツシミタマオオカミ)と布留御魂大神(フルミタマオオカミ)となっている。

石上神宮に祭神として祀られたフツ(スサノオの父)、フツシ(スサノオ)、フル(ニギハヤヒ)の3名の名前からは、彼らがかつて朝鮮半島南部に存在したフル王国の王族関係者であったことが推測される。

ヤマトの伊勢神宮を筆頭として日本には朝鮮半島系の諸民族が建てた「神社」が分社も含めて全国各地に点在する。

朝鮮系の新羅神社の呼称は「しんら」と「しらぎ」が混在した「白城」「白木」「白鬼」「信露貴」「志木」「白井」「白石」「白髭」「白磯」などである。

また中には渡来系の神社である痕跡をまったくもって消し去った「気多」「気比」「出石」などと呼ばれる神社もある。

もちろんスサノオを祭神として祀っている神社も多く、そのスサノオは様々な呼称を持っている。

例えば牛頭天皇、祇園様、天皇様などの他に、八口大明神、新羅明神、白髭明神、比良明神、ツヌガアラシト、天日槍、白日神、新羅神、新羅三郎(源氏系)などがある。

古事記によれば、そのスサノオが高天原から追放された後、新羅のソシモリから子の五十猛命(イソタケル)と共に土舟で出雲国・斐伊川の上流の鳥上の峰に降り、その地で悪行を働いていた？ヤマタノオロチを退治し、オロチが所有していた神剣を手に入れ、アマテラスへと献納したことになっている。

スサノオが朝鮮半島系の渡来人であることは、韓国慶尚北道南西部・高霊の私立加耶大学の敷地に建てられた“高天原故地”の石碑の存在からも十分に窺い知ることができる。

ヤマトの太陽王国への侵攻の準備段階として派遣された威力偵察部隊の指揮官にして、百済とは極めて縁が深いフル王国の王族、それがスサノオの正体なのであった。

ニニギノミコトによる天孫降臨では高千穂の久士布流多気(クシフルタケ)の峰に降ったとされ、故地の名を山に冠したこのフルの名称からヤマトのルーツが、朝鮮半島南部の旧フル国(ミチョル国)であることが明らかとなったのである。

◎ヤマタノオロチ退治神話の舞台と積石塚の構築者◎

日本の古代史において正史と位置付けられているのが記紀であるが、ヤマトが偽りの天孫降臨の歴史の正当性を広く世に知らしめ国内外の人々の洗脳を目的として編纂した書物が天皇家の内部文書の性格を有する古事記であり、また主に天皇家の由来の正当性を喧伝するための政治的・対外的公文書としての性格を有するのが日本書紀である。

さらに地域の慣習、土地の風土や産物の特色及び神話や伝説、伝承などをまとめて中央に提出した報告書が風土記なのである。

特に記紀による古代史は、太陽神(天・宇宙)とのコンタクトから人間の王国を築いていた日本原住民族アイヌを、マツロワヌ民として武力侵略及び同化政策を強制してきたヤマトの原住民側への武力侵略の歴史を、その時々の権力者が己の都合を最優先して真実を脚色、改竄して作り上げたものに他ならず、偽史、悪史と呼ぶに相応しい代物である。

なかでもスサノオを英雄として祀り上げた

“ヤマタノオロチ退治”神話(以下オロチ伝説)は、記紀には記述されているが、その正確性から本来記述されてしかるべき「出雲国風土記」には一行も触れられていない。

本事件の発生が出雲ではなく、その本拠が古志であればそれは当然のこととなるのかもしれず、そうであれば広大な古志のどの地域で発生した事件であったのかそれを探ってみよう。

オロチ伝説を検証すると出雲では雲南市加茂町にある八口(矢口)神社の境内説明文に具体的記録を見出すことができる。

祭神はスサノオであるがオロチの頭を切ったことから八口大明神とも呼ばれている。

この「八口」の名称からは出雲国風土記に記述された大国主による古志(越)の国八口の平定事件が浮上する。

同風土記の意宇郡母里郷(現島根県安来市)の地名説話には『大穴持命(大己貴神＝オオナムチノミコト)、越の八口を平らげ賜ひて還り座す』との記述が見受けられる。

大国主を総司令官とする太陽王国と反太陽王国の武装勢力とが八口で戦闘を行い、太陽王国側が勝利したと読み取れる貴重な内容である。

提起されるべきは八口神社と古志の八口という偶然とは言い難い「八口」という二文字の共通性なのである。

この「八口」なる呼称がオロチ事件の神話の舞台を特定するキーポイントになるのではないだろうか。

そこで古志の八口に該当する地名を地図上に求めたところ新潟県岩船郡関川村の「八つ口」が浮上した。

関川村は新潟県北部のR113号線を約15km東進した地域に位置し、市街地からさらに約9km東進した山形県境近くの荒川沿いにその「八つ口」の集落が存在する。

果たせるかな、その八つ口の集落には「スサノオとヤマタノオロチとの戦い」が伝承されているばかりか、八つ口の地名がそのヤマタノオロチに因んで名付けられたというから唖然とする。

そして八つ口集落から約5km南西に位置した大里峠には、その地域を舞台とした有名な「大里峠の大蛇伝説」が存在している。

「えちごせきかわ大したもん蛇祭り」は関川村に伝わる大蛇伝説をテーマに1988年より始まり2001年ギネスブックに認定される。

関川村ではその伝説に因み“竹とワラで製作した世界一長い蛇”とギネスブックにも認定された勇壮な『大したもん蛇祭り』を開催、その祭りが村外でも披露されている。

多種多様に語り継がれた大蛇伝説は関川村のみならず近隣の市町村及び他県の山形県にも広く分布していることが判明しており、関川村が大蛇伝説の淵源と見られている。

その大蛇伝説に関する膨大な伝承資料、文献資料を山形大学の教授阿部八郎氏が収集し、それが地域、内容、年代順など多様な視点から詳細に分類、研究され、その成果である『越後せきかわ大蛇伝説及び越後せきかわ大蛇伝説資料編』(著者阿部八郎)の二巻が、1995年関川村より出版された。

同村よりご提供いただいた貴重な書籍二巻(約900頁)と他の資料などを検討した結果、ここ新潟県関川村の「八つ口」が記紀に記述された「ヤマタノオロチ伝説」の発生舞台であると特定するに至ったのである。

しかし、記紀のヤマタノオロチ神話と関川村やその近隣における「大蛇伝説」とでは、少なからずその内容が異なっている。

そこで、多様な伝説の中でも最もマイナーな内容と考えられる『大里峠の大蛇伝説』を参考に、「大蔵神社畧縁記」に記述されたそのストーリーの特徴的要点を以下に列記する。

・女の禁断の蛇喰い事件の発生。
　或いは蛇喰い事件なし。
・大蛇へと変貌、山(大里峠)の主となる。
　或いは毒蛇出現、村民の毒蛇退治祈願。
・大里峠での琵琶法師と蛇精(大蛇)としての女との遭遇。
・女の素性の告白と新たな棲家の要望。
・大洪水(湖或いは泥の海)発生の通告。
・琵琶法師(含む身内)への避難勧告。
・通報の禁止と己の弱点が鉄であると告白。
・法師の村人(権力者)への通報と死(不明)
・村人による鍛冶屋での鉄の武器の製作。
・武器或いは大蔵神社の鉾を携えた多数の兵隊(村人)とオロチとの7日7晩の死闘。
・オロチの死と法師への報恩。
・大蔵神社の建設或いは法師の合祀。

以上、大里峠の大蛇伝説では大洪水の発生とオロチ退治がリンクされオロチが悪者となっているようだ。

一方、少例ではあるがオロチが悪者どころか逆に村人から尊崇された存在であったことを窺わせる伝説が「大蔵祀詞」「郷里のおとづれ」などに記述されている。

以下、それらのストーリーの要点である。

・女の蛇喰い事件の発生。
・蛇身へと変貌、消息不明。
・お里峠で琵琶法師と少女(女)が遭遇。
・女の素性の告白、数百歳或いは千歳、身は千丈に及ぶと。
・この山が棲家、数百年間村民の五穀豊穣に尽力した。
・村民は数百年間にわたりオロチへの祭祀を実施した。
・村民或いは里長の一方的祭祀の廃止、オロチへの侮辱と眷属(親族・臣下・配下の者)への殺傷行為に激怒。
・大洪水(湖或いは泥の海)発生の通告。
・以下、「大蔵神社畧縁記」とほぼ類似。

さらに、蛇喰い事件については触れていないが、何故オロチが悪者とされるに至ったのかその核心をつく「座頭之宮由来」の伝説が存在する。

そこにはオロチと村人、オロチと権力者とのやりとりが実にリアルに表現されている。

以下、その要点である。

・目代(地方長官)の夢枕に女が出現。
・素性と出現理由を語る。

「越後せきかわ大蛇伝説」書籍2巻

オロチ族とヤマトの激戦地と想定される
八つ口の蛇崩山（531m）

・村民の自然破壊により、かつては広大な池であったオロチの棲家が年々消失する。
・棲家が荒らされ田畑と村に変貌、オロチ食料に困窮する。
・オロチ豊穣半ばの五穀をやむなく収穫。
・村人犠牲の奉納と引き換えに収穫行為の中止をオロチへ嘆願。
・オロチ、嘆願の了承と豊作への尽力を約束。
・村民数百年間において犠牲の奉納とオロチへの祭祀の履行を約束。
・目代、古のオロチと村人との約束事を破棄。
・目代の計略で宮を破壊されたオロチが棲家を失い山中へ篭る。
・山中（お里峠?）で琵琶法師と女が遭遇。
・女素性の告白と大洪水（湖）発生の通告。
・以下、「大蔵神社畧縁記」とほぼ類似するが、オロチ退治に使用の武器は鉄砲である。

これら「大蔵祀詞」「郷里のおとづれ」「座頭之宮由来」などの伝説からは、次ぎのことが推測された。

オロチは人間で村民に恩恵をもたらし尊崇された偉大な存在であったが、人間性を失い物質文明に傾倒した村民達がオロチの祖先との約束事を忘れ去りそれを反故にした。

結果、オロチの生活圏において日常的に自然破壊が行われ、オロチの子孫及び関係者に対して詭計を用いた惨殺が遂行されたのである。

強力な鉄の武器と詭計を駆使したオロチ族に対するヤマトの侵略戦争であったことが、これらの伝説から見て取れるのである。

また、『越後せきかわ大蛇伝説』に記述された蛇崩山（530m）、蛇喰、女川、於里峠、大里峠、おり峠、鍛冶屋野村、金屋、尾打ち淵、尾落ち淵、大内淵、もうらの淵などという現存するオロチにまつわる多くの地名が、伝説が史実であることの裏付けともなっているのであった。

記紀ではオロチの巨大性（長さ）を表す尺度に「八谷」という表現があるが、大蛇伝説でもそれに類似するであろう「関八つケ谷」「八つ谷」の文言が見受けられる。

だが、「関八つケ谷」「八つ谷」の言葉は巨大性と何ら関係がなく地名として用いられていることから、記紀の「八谷」もそれと同様にオロチの巨大性を表すものではなく、オロチの生活圏を表す地域名称として用いたとの解釈が成り立ってくる。

また一族一門の統率者及び集団の中心人物の表現として、建物の棟・梁になぞらえて棟梁・頭領・かしらなどと呼ぶが、「越後せきかわ大蛇伝説」によると、関川村では「かしら」

のことを何と「オロチ」と呼んでいるから驚嘆である。

前章において「ヤマタノオロチ」とは最低でも8名の地域首長の表現であると解説したが、ずばりそれが的中したことになる。

『越後せきかわ大蛇伝説及び同資料編2巻』が決め手となりヤマタノオロチ伝説の舞台が出雲地方ではなく、古志(越)の八口、すなわち新潟県岩船郡関川村の八つ口であると特定するに至ったのである。

だが、そのヤマタノオロチ伝説がどのような経緯で遥か西方の出雲発祥の伝説となったのか疑問が残るのである。

仮に古志国(関川郷)在住の「オロチ事件」の関係者、もしくはその子孫達が出雲へ集団移住したとするならば、その可能性も十分に考えられるのだが？

それを念頭において古文献を紐解くと、幸運にも古志国の人々の集団移住に該当する出雲国風土記の記述にヒットした。

出雲国風土記「神門郡の古志の郷」の条では、『イザナギノミコトの時代に、日淵川を利用して池を造った。その時に古志国の人たちがやってきて堤を築いた。

それ以来、古志国の人達が居住するようになったので、そこを古志というのである』と出雲古志の地名由来を紹介している。

また、出雲地域の一部で話される東北弁(ズーズー弁)や出雲在住の人々を対照として国立遺伝学研究所教授齋藤成也氏のチームが2014年に実施したＤＮＡの鑑定結果から導き出された「出雲人は西日本よりも東北人に近い」という見解が、偶然にもその移住を裏付けることとなった。

出雲古志の地名由来によって想定した古志国の住民による集団移住が判明したが、ここでの集団移住者とは、詭計戦術を常套手段とするヤマトとの戦闘に敗れたオロチ族と推察され、彼らは戦闘で多くのリーダー(各地区の首長)を失っただけでなく、逃げ遅れた一部の人々はヤマトの捕虜として、或いは奴隷として出雲に強制連行されたのである。

ヤマタノオロチ伝説は出雲に強制連行されたそのオロチ族の関係者が、代々語り継いだ話であったのではないのだろうか。

他方ヤマトはオロチ族との戦闘の真実が明らかになるのを恐れて、オロチ族を荒唐無稽な爬虫類へと仕立て上げて侵略事件を脚色、捏造し、悪の象徴として「オロチ退治伝説」を記紀に組み入れと推察されるのである。

少彦名命神（オキクルミカムイ）の援助を受け共に人間の国土を造り上げた大国主より古志国北部の統治を託されていたオロチ族を、ヤマトがいかに恐れていたかが記紀の荒唐無

大国主を祭神とする石井神社。出雲崎の由緒や大国主に纏 わる伝説が残っている
（新潟県出雲崎町石井町）

石の祠は12株の大樹の辺りに造られた
旧石井神社跡（出雲崎町井鼻）

★出雲崎の大国主の伝承★

‥‥大国主之命頚城(現上越市居多)よりこの里に移りたもうて海面の孤島(現佐渡島)を平治せんと欲し給えど船を造る巨木の無いのを憂いられ宮居近き石井の水を大地に注ぎ給いしに、不思議にも一夜のうちに12株大樹が忽然と生えた。
其の霊樹で船を造りて島にお渡りになった。
紫雲(雲や霞)あいたなびき、大小の魚族(魚や海亀)がお船を佐け護り、無事にお渡し申したので、その孤島をタスケワタシ(佐渡)の島と云いまた、鱈をスケトウと云う。
佐渡を平定し去られるに臨み、この地・かの島を往来するには良き処である、航海の船を保護せんと云々。
12株の石井の辺りに宮造りし会場鎮護の大神と崇め奉る。
其の旧地は井之鼻十二林山と伝えられている。
また佐渡から戻った大神を十二株のそばに宮を造り、越佐海峡往来の海上守護神として祭った。
そこから石井の鼻、略して井鼻(いのはな)の十二山で、雲立ちのぼる出雲の里、雲の浦と呼ばれたのが今の出雲崎だという。
(石井神社遷座年記略伝より)

稽な「ヤマタノオロチ神話」の考察から明らかとなった。

また宇宙より偉大な功績によって地上のキングに任命された大国主を、天孫降臨の権威付けとその正当化を目的としたスサノオが、己の1世の子、あるいは六世の孫であると偽りの系譜を作成、利用していることからもそれは明らかなのである。

しかし、詭計を用いてオロチ族を亡ぼした関川郷でのヤマトの支配はそう長くは続かず、大国主を総司令官とする王国軍がヤマトに占領された関川郷の奪還とヤマトの撃退を目的として出撃したことはいうまでもない。

頚木(現上越市)から出撃した王国軍は、八口を平定後、出雲崎から佐渡島へと渡り、ヤマトの残党をことごとく退治して再び出雲崎へと戻ったのであった。

出雲国風土記の「大国主による古志の平定」の記述や新潟県出雲崎の石井(イワイ)神社の「オオクニヌシによる佐渡の平定」の伝承がそれを物語っている。

大国主率いる太陽王国軍により関川郷からヤマトが撃退されたが、既に多くのオロチ族は列島各地へと離散していた。

その中でも比較的多くのオロチ族は天然の要害に囲まれた信州(信濃)や岩手の地を移住先として選択している。

彼らは信州の地で体制を建て直しつつ、土着の人々と人間の王国を形成、何れ激突することになるであろうヤマトとの戦闘に備えたのである。

そのオロチ族の痕跡は県内髄一の大室山古墳群などの積石塚などに顕著に認めることができ、オロチ族の一部にはヘルスクル(積石塚やストンサークル)構築の慣習をもった部族の存在が示唆される。

一般的には積石塚や合掌型石室が朝鮮系渡来人(高句麗・百済)に由来した墳墓であるとする墓制説が主流を占めているが、その朝鮮系渡来人による墓制説には疑問を呈さざるを得ないのである。

というのは、信州(長野)や県境を接する甲斐(山梨)の積石塚の出現時期と両県へ渡来人が居住したと推察される時期との間に、大きな時間的乖離が見られるのである。

長野、山梨両県での積石塚の出現時期は、
①長野県 八丁鎧塚古墳4世紀後半～5世紀後半、大室古墳群5世紀後半
②山梨県 横根古墳群6世紀

長野、山梨両県への渡来人の居住時期は、
①長野県 7世紀
②山梨県 7世紀後半
とされている。

長野では8世紀から9世紀初頭にかけて多く

全6期からなる東日本最大、最古級の八丁鎧塚古墳【積石塚】 1号墳【写真右4世紀後半】2号墳【5世紀後半】
周囲には他に約40基の積石塚が点在している（同県須坂市上八町）

の高句麗人が日本名への改正を請願しており、彼らは“先祖が飛鳥時代(592年～710年)に渡来した”と語っている(日本後記)。

他方飛鳥時代は唐と新羅の連合軍が百済(660年)、高句麗(668年)を滅亡させるというヤマトを巻き込んだ重大事件が発生した時期でもあり、遺民となった朝鮮系渡来人が激増した。

その遺民と推察される高句麗人が甲斐(山梨)や関東、中部などの7カ国へ移り住んでいるのである(日本後記)。

甲信地方における積石塚出現時期と朝鮮系渡来人の居住開始時期との間には、最低でも2～3世紀の乖離が見受けられる

また積石塚の築造には専門的知識を有する技術者集団の存在が不可欠であるにも拘わらず、積石塚の周辺には渡来人が居住した痕跡がほぼ見当たらない。

つまり、積石塚の築造者を朝鮮系渡来人と認定するには、相当な無理が生じていることになるのである。

一部の学者は、朝鮮半島と日本の積石塚との構築方法の相違、及び高句麗人の居住に由来する山梨県･旧巨麻郡には積石塚が存在していないことなどや渡来系神社と積石塚の分布が合致しないことなどを例に上げて、朝鮮系渡来人の墓制説に否定的見解を唱えている。

朝鮮系墓制説の肯定派が依拠しているのは、古代信州(17カ所)や甲斐(3カ所)などに存在したとされる御牧(古代朝廷の直轄牧場)の記録である。

その記録と朝鮮系渡来人との関係を端緒としているようだが、御牧について言及する「日本紀略」の記録は9世紀を遡るものではなく、甲斐における渡来人の日本名への改正や移住に関する記録(日本書紀･続日本紀)でも7世紀後半を遡るものではない。

より古いとされる「甲斐国史」の御牧の記録に至っては、その裏付けとなる物的証拠が存在せず記録の真実性に疑問符が付いている有様である。

また長野県と山梨県の古墳の総数に対する積石塚の高比率も渡来人築造説を否定する材料の一つとなるのである。

同じ渡来系でも信州や甲斐における積石塚の築造者は、「三本足のカラス」を紋章とする朝鮮系(百済･高句麗)の民族ではなく、太陽マークを紋章とする宇宙に指向した北方(北東)アジアのオロチに代表された少数民族なのであった。

◎信州から奥州、そして北海道へ◎

古志、信州の古代史を検証すると、そこには人間国土(太陽王国)の建設を第一義として

聖戦に身を投じた大国主、建御名方命、オロチ(族)、両面スクナ、磐井、八面大王などの偉大なキングや首長の姿が浮き彫りとなる。

記紀に代表されたヤマトの皇国史観とは真逆となる真実の古代史に気付かされる。

ヤマトの詭計に敗れはしたが伊勢からの建御名方命(伊勢津彦)を筆頭に、オロチや6世紀後半の安曇族が遥々九州から再起を期するべくここ信州の地に拠点を置いた。

そして、建御名方命から連綿と続く人間的素養に溢れた信州の大地から8世紀後半、キング磐井の末裔と推察される『八面大王＝ヤメノオオキミ』が誕生、その精神が引き継がれたのである。

信州は、西側には飛騨山脈(北アルプス)と木曽山脈(中央アルプス)、東側には八ヶ岳連峰と赤石山脈(南アルプス)という天然の要害に囲まれた土地である。

また2,831基の古墳が象徴したように善光寺平（北信)、松本平(中信)、上田･佐久平(東信)、伊那平(南信)を擁した信州には、東西南北の平地に隙間なく防衛ラインが築かれ、それらにぐるりと取り囲まれるかのような旧穂高(安曇野)の地を安曇一族が選択して移住しているのである。

そして、東西南北何れの地域をとってもヤマトの侵攻の容易ならざる信州の中央部に位置した『安曇野』の台地に、簡素ではあるが九州の八女を彷彿とさせる太陽王国の本拠地に相応しい宮城(高貴な人物の居所)が築かれたのである。

八面大王の岩窟(有明D-1号墳)であるとの伝承が残る穂高有明地区に現存する宮城の地名や、683年ヤマトの天武天皇が信濃への遷都を計画した日本書紀の記述、及びそれにまつわる伝承などが、王国の拠点がその地に置れた事実を補完しているのである。

桓武天皇(在位781年～806年)の即位後、平安京の建設･遷都と朝廷が鬼門とする東北･岩手の勇者を意味したエミシ(蝦夷)征伐が本格化し、エミシへの導線である東山道を擁した甲信地方では、ヤマトへの度重なる軍役や軍需物資の強制的供出に住民の疲弊が極限に達していたことは容易に想像できる。

そのようなヤマトの非人道的行動を看過できず、人間として正義の狼煙を打ち上げて果

★鬼無村伝説★

「日本書紀」や「釈日本記」によると、『天武天皇は新都･副都の建造の調査のため、683年(天武12年)に使者三野王(美濃王)，小錦下采女臣筑羅らを信濃国へ派遣した。

翌年には信濃国の地図が奏上され、685年(天武14年)10月には詔により「朿間温湯」に行宮が造営された。詔は天武天皇の罹病後まもなく発せられたが、天皇はそのまま崩御し、行幸は実現しなかった』。

★一夜山の鬼★

昔むかし、天武天皇が遷都を計画され、その候補として信濃に遷都に相応しい地があるかを探らせるため、使者を信濃に遣わせました。
使者は信濃の各地を巡視して、水内(みのち)の水無瀬(みなせ)こそ都に相応しい地相であるとの結論を出しました。
これを知ったこの地の鬼(原住民)たちは大いにあわてて、「この静かなところに都なんか出来たら、俺たち棲めなくなる」「都が出来ぬよう山を築いて邪魔をしてしまえ」と、すぐさま里の真ん中に大きな山を築いてしまいました。
これでは遷都はできません。
怒った天皇は鬼達を退治してしまいました。
この時から、この水無瀬の地に鬼はいなくなったので、人々はこの地を鬼無里と呼び、真ん中に出来た山を一夜山と呼ぶようになりました。

四支郡（猫谷地古墳群・五条丸古墳群・八幡古墳群・長沼古墳群）から構成された江釣子古墳群【積石塚】。直径10m前後、高さ1mほどの円墳が120基ほど確認されている主体部の大半は、川原石を小口積みにした積石塚で、多くの新式のワラビテ刀が出土している。

敢にヤマトに抵抗したその人物が八面大王であり、その傘下には同志である136名の参謀(長)と多数の志願兵がいた。

大王軍はヤマトの攻撃に対して幾度となくゲリラ戦で応戦したが、記録によると789年八面大王はヤマトの詭計により参謀共々戦功も空しく惨殺され非業の死を遂げている。

同年、圧倒的優位を誇る約5万3千のヤマト軍とアテルイを大将、モレを副将とするエミシ軍(アテルイ軍)とが北上川の支流である岩手県の衣川で対峙、激突したが、ヤマト軍は完膚なきまでにアテルイ軍に叩きのめされ惨敗を喫している。

大王軍のヤマトへの抵抗がエミシ征伐の計画に少なからず影響を及ぼしたことは論を待たず、八面大王の人間的行為は同志アテルイへの側面支援を担っていたのである。

アテルイ軍にとってのヤマトとの衣川での戦闘は、はからずも志し半ばにして聖戦に散った八面大王とその同志を慰霊する“弔い合戦”であったに違いない。

その八面大王の信州とアテルイの奥州には、積石塚やワラビテ刀に象徴される共通の文化が存在する。

古来より両者間での人的、物的交流が盛んに行われたことの証でもある。

信州の積石塚を代表する八丁鎧塚古墳や大室古墳群の築造年代は4世紀後半～8世紀だが、他方蝦夷塚とも呼ばれる奥州を代表する北上市･江釣子の約120基の積石塚(江釣子古墳群現存76基)の築造年代は7世紀後半から8世紀。

同じく宮城県･石巻市の約51基の積石塚(和泉沢古墳群)の築造年代は8世紀～9世紀である。

東北では主に積石塚から出土する三型式(Ⅰ～Ⅲ)に大別されたワラビテ刀が、全体の8割を占める東北･北海道のⅠ型(新式)よりも中部･関東を主体とするⅡ型、Ⅲ型が古く、信州では7世紀、東北では7世紀～8世紀の製作と推定されている。

また北東北では八戸市の丹後古墳群(約100基)及びおいらせ町の阿光坊古墳群(108基)に代表される末期古墳が、7世紀～9世紀頃に築造されている。

その古墳と同系統とみなされている群集墓の北海道式古墳が、8世紀後半～9世紀中頃にかけて道央の石狩低地帯(江別･恵庭など)に出現する。

また北海道式古墳と北東アジアの少数民族が開花させた道北のオホーツク文化の遺跡からは東北で製作されたワラビテ刀が出土しており、北東北からの主に江別周辺への移住者の存在がクローズアップされる。

100基以上と推定される末期古墳形態の丹後平古墳群（青森県八戸市）隣町のおいらせ町にも同形態の阿光坊古墳群125基が存在する。
丹後平古墳群から出土した金属刀の6本がワラビテ刀。

信州と東北での積石塚の築造とワラビテ刀の製作年代の相違について考察すると、まず信州から関東・東北へと積石塚･ワラビテ刀文化を携えた人々が移住し、さらにその人々は北東北から何故か道南地域をスルーして道央の石狩低地帯である江別周辺へと移住していることが判明してくる。

またヤマトの中部･関東･東北への武力侵略の歴史的行程と、信州の八面大王の関係者及びオロチを中核とした戦闘能力に秀でた技術者集団が関東、そして東北へと移住したことが相関してくるのである。

紀元0年頃、オロチに代表された北東アジアの少数民族が太陽王国の動静を窺うヤマトの不穏な行動に危機感を抱き、大海を越えて石狩低地帯である道央･余市のフゴッペ及び江別周辺に居住した。

その後東北･甲信越地方へと移住。

新潟北部のオロチはヤマトの侵略を受け、スサノオの詭計により8名の首長を失う壊滅的状況に陥った。

一部は捕虜（奴隷）として出雲へと連行され、難を免れた人々は全国各地へと離散したが、かなりの人々は信州と奥州の岩手へと逃れたのである。

岩手に逃れたオロチは5世紀後半、風雲急を告げる太陽王国の防衛をミッションとした磐井一族に帯同を許され九州へと移住。

キング磐井の心血を注いだ石人･石馬の文化に象徴された新たな九州太陽王国の建国に尽力した。

だが6世紀初頭、王国の本拠地がヤマトの侵攻を受け、戦闘が1年半に及ぶも常套手段であるヤマトの詭計によって九州太陽王国はほぼ壊滅状態へと陥った。

安曇海軍としても名を馳せた彼らは磐井一族を補佐し出雲へと移動、その地に数十年滞在した後、再起を計るべく同族が守る信州へと一族と共にやむなく後退、安曇野へ移住してその地を宮城と定めた。

21基の江別古墳群(上)(江別式・北海道式・末期古墳とも呼ばれる)札幌、恵庭でも同形態の古墳が発見されており、ヤマトに追われた東北からの移住者が構築したと推察できた。
道路を挟んだ北側には「江別チャシ」(下)が構築されている(北海道江別市)

安曇野市では穂高神社他4ヶ所の神社で大きい船を曳行する「お船祭り」が催され、同様の祭りは松本市の須々岐神社や下諏訪町でも行われている。

海人族である安曇海軍に由来したお祭りであると推察できる。

彼らは東北のエミシとも人的、物的交流を深めていったのである。

8世紀後半、ヤマトのたび重なる地域住民への不条理な行為に、磐井の子孫である八面大王(ヤメノオオキミ)が人間の狼煙を上げる。

安曇海軍を象徴する穂高神社に奉祝された【御船】

オロチの子孫も大王の人間的行動に賛同、ヤマトに果敢に抵抗するもヤマトの詭計で多くの仲間を失った。

大王没後、関係者一族は県内北部(中野市岩井地区)に逃れたが、執拗なヤマトの追撃をかわして関東、そして東北の同族とエミシを頼って北上、アテルイ軍へと合流した。

しかし、ヤマトの詭計に陥りアテルイとモレが斬首されたことで岩手からさらに北へと逃れ、最終的には先祖の第二の故郷とも言える石狩低地帯の江別へと帰還した。

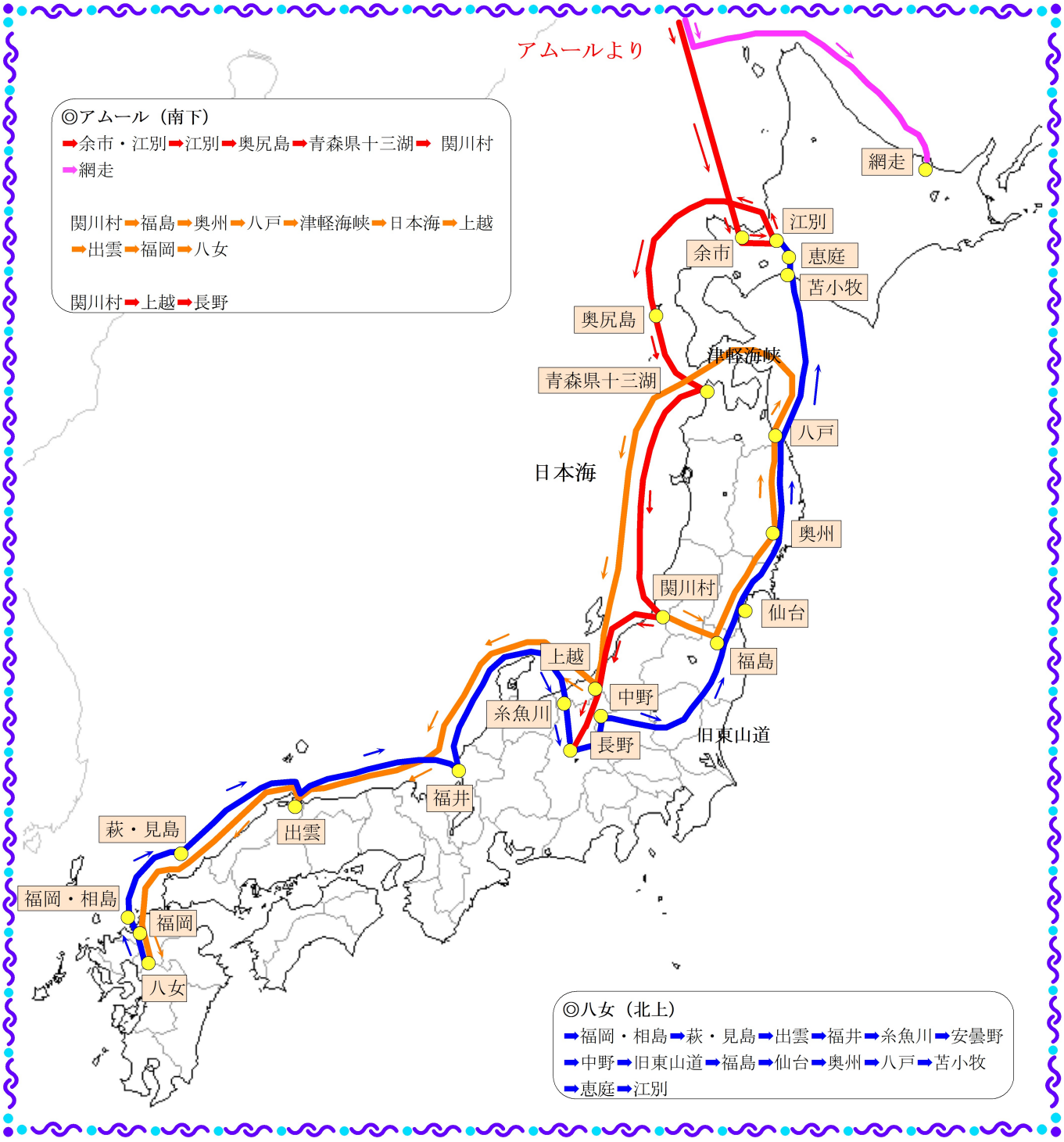
前号に続く“八面大王の実像”の多様な視点の考察によって、八面大王がアイヌ系であることや運命を共にしたオロチの約8百年間に及ぶ“オロチヒストリー”とその足跡を辿った“オロチロード”が明らかとなった。

◎オキクルミカムイとアイヌ文化◎

あらゆる民族のルーツや支配関係を解き明かす遺伝子(ミトコンドリア及びY染色体ハプログループ)と最新の核ＤＮＡ(ヒトゲノム＝人の全遺伝情報)などの研究解析の結果、約3万～4万年を遡る列島古来の日本原住民(先住民族)が縄文系アイヌであることがほぼ明らかとなっている。

その縄文系アイヌがサハリン(樺太)、千島

オロチロード



列島、北海道から沖縄に至る列島各所に居住した先住民族であることは、日本全土から出土する縄文系土器や散見されるアイヌ語の地名から窺い知ることができるばかりか、北海道以外の地域に今も残っているイナウ(御幣)やそれに類するものを奉る風習がそれをより補完しているのである。

日本列島において朝鮮系・中国系ヤマトが武力と詭計を巧みに駆使して人間の王国を築き上げ平和に暮らしていた列島の原住民であるアイヌを土蜘蛛、国栖(クズ)、鬼、オロチ、ヤツカハギ、エミシ(蝦夷)或いは“まつろわぬ民(ヤマトが信奉するアマテラス信仰への改宗を拒否した民の総称)”などと蔑視、彼

らを武力侵略し、殺戮と同化政策を推進して非人間的天皇制王朝を樹立して今日に至っているのは歴史的事実である。

戦前、戦中における天皇は、ほぼ明治初期に確立された万世一系論をバックボーンとした現人神(アラヒトガミ)と称して権勢を欲しいままに行使した。

何ら正当性の伴わない太陽神の子孫である天皇を自認し、擬似太陽マークである“日の丸”と“菊の紋章”を前面に掲げて、人類の頂点への君臨を夢見たその非人道的行為が、結果として現在では近隣諸国に核や最新兵器での武装をより加速させるその端緒をつくり上げてしまったのである。

戦後、象徴天皇という位置付けから以前の権力が削がれたかのようにも見えるが、人類史上最も危険なカルトである神道に支えられたそのカリスマ性は、今も衰えることはなく政教分離を憲法で謳っていても神道の継承儀式に国家予算が投入されている。

考古学や歴史学、民俗学に精通した学者達の言葉を引用するなら、アイヌ文化の成立時期は12世紀～13世紀ころであるというが、この見解は事実誤認も甚だしく、弥生時代の中国系渡来人である徐福や朝鮮系ヤマトの武力侵略と同化政策による破壊的な物質文明の流入によって、先住民族アイヌは主に北と南へと追いやられアテルイ没後の9世紀以降は「人間らしく生きる」とした本来のアイヌ文化は衰退途上にあったと言わざるをえないのである。

本来のアイヌ文化とは、太陽神オキクルミカムイ(アエオイナカムイ)が教導した『アイヌネノ・アン・アイヌ＝人間らしい人間』の精神文化の実践と、オイナに謡われた太陽円盤マークを原点とする正義に立脚した真の人間の規範に基づいて積み上げられるものなのである。

太陽マークを基調、踏襲した結果として世界を凌駕する**土の文化**(縄文土器・遮光器土偶・中空土偶など)や**石の文化**(巨石遺構・石製象形遺物・太陽マークと関係する古墳など)、**木の文化**(イナウ・ウッドサークル・住居や舟を含む木製品など)と、**口承文芸**(カムイオイナとユーカラ)や渦巻刀・蕨手刀などが誕生したのである。

“出エジプト記”や“パプア・イプアー”が記述したようにBC13世紀ころ発生した宇宙的動乱に遭遇し、縄文晩期以降一時的に文化が衰退した時期もあるが、概ねその繁栄期間は縄文時代前期から古墳時代の6世紀初頭までである。

アイヌ民族に限らず、世界の多くの先住民族は、太陽神とコンタクトしたこの縄文時代前期(約7,000年前から5,500年前)に相当する時代を黄金時代であったと伝えている。

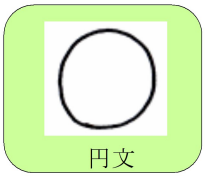
本来のアイヌ文化は5世紀後半から6世紀初頭までのキング磐井が築き上げた九州太陽王国の滅亡を境としてほぼ終焉を迎えるが、ヤマトの侵攻のタイムラグから関東・東北の一部では、装飾古墳の太陽マークが示唆するようにその文化は7世紀～8世紀ころまで続いていた地域もある。

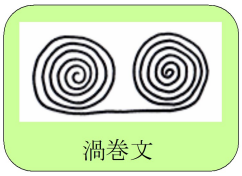
学者によると北海道の文化期は、縄文文化以降を続縄文文化期(0～7世紀)、擦文文化期(7世紀～12・13世紀)、そしてアイヌ文化期(12・13世紀～)に区分けされるという。

道北・道東では続縄文から擦文までの期間にC2遺伝子を持つ北方アジア系の少数民族が、オホーツク文化及びトビニタイ文化(3世紀～13世紀)を開花させている。

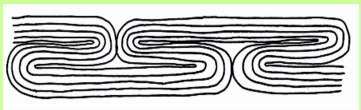
13世紀以降、本州から北海道南部への和人(ヤマト)の進出が加速されたことで、和人の

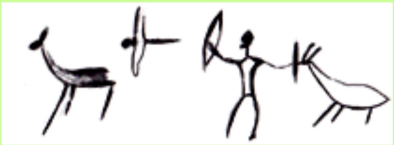
★銅鐸の文様とフゴッペ・手宮洞穴の刻画★

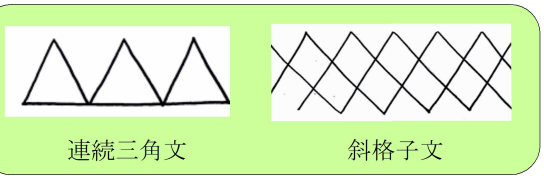

円文

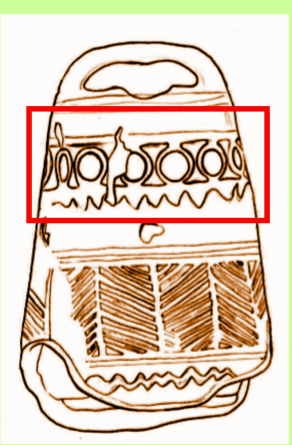

渦巻文

連続渦巻文


流水文

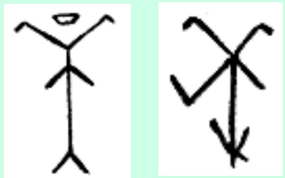

狩猟

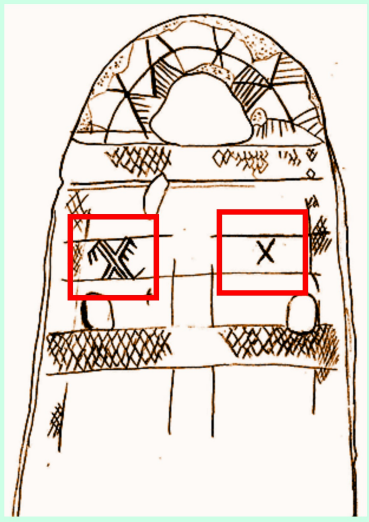

連続三角文　斜格子文


東奈良遺跡　銅鐸

フゴッペの刻画

フゴッペの刻画


手宮の古代文字の刻画


宇宙へ指向した民族が残したフゴッペ洞窟(北海道余市町)や手宮洞窟(小樽市)の線画と類似する中川原遺跡出土の銅鐸の文様。(兵庫県州本市)

貴重な円文を装飾した東奈良遺跡出土の銅鐸（高さ14.4cm・巾9.5cm大阪府茨木市）。
銅鐸の文様の起源を古代中国や朝鮮に求める向きもあるが、太陽王国の所産である太陽マークにその文様の起源が求められる。
幾何学文(渦巻文及び連続渦巻文・鋸歯文と呼ばれる三角文及び連続三角文・菱形文・斜格子文)やイカシシロシの変形と推察される綾杉文、流水文の装飾が主流であるが、他に鹿などの動物や昆虫、狩猟などの状況が装飾されている。
これらの文様からは、銅鐸の製作者が太陽王国と関係のある狩猟、採取を基盤とした紛れもない人間文化の担い手である縄文系アイヌ（日本原住民）であることが判明してくる。
主に銅鐸、銅剣が土中より発見されるのは、武器或いはその材料が凶悪なヤマトへ渡ることを危惧しての行動である。
縄文土器や九州に代表される太陽王国系統の装飾古墳及びアイヌ文様に幾何学文が多く認められる。

活動領域が拡大して交易に名を借りた搾取と非人道的行為が横行、各地でアイヌとの紛争が激化した。

またアイヌ(人間)の魂をヤマトに売り渡して私利私欲に走った“お味方アイヌ”の出現により、同胞内での格差が生じたのに加えて、ヤマトとの同化が進行した。

そのような状況の中で「人間みな平等」の精神から同胞の救済と現状の打破、及び今後過酷な状況に遭遇するであろう民族の未来に著しい危機感を抱いた15世紀のコシャマイン(道南地区)、16世紀のタナサカシ(道南地区)、17世紀のシャクシャイン(道南の一部･道央地区)らが相次いで蜂起した。

しかしながらヤマトとの戦いを優位に展開するも蝦夷地の道南を所領していた蠣崎氏の軍隊やその子孫が立藩した松前藩の詭計の前に敗北を喫し、何れもが斬首に処せられたのである。

その後の18世紀の寛政蝦夷蜂起(クナシリメナシの戦い)を最後としてアイヌによる武装蜂起は終了した。

このような搾取と圧制と武力侵略が交錯する社会情勢下において、何故に12世紀～13世紀以降をアイヌ文化期とするのか、首を傾げたくなるのである。

アイヌ民族はその時期にボートピープルと化して突然北海道に漂着した訳でもなく、また天から降臨した訳でもなく、地から沸いた訳でもないのである。

和人とのコンタクトから人口が減少傾向にあったとはいえ12世紀以降もアイヌは存在している訳だから、それらの遺物や芸術性をもってしてアイヌ文化と呼べなくもないが、最も肝心なアイヌの始祖神であり、様々(文化神・英雄神・農耕神・雷神)に呼称されたオキクルミカムイ(アエオイナカムイ＝伝承神)の存在と、アイヌ民族に及ぼした偉大な功績が忘れ去られているのである。

アイヌ民族の文化のオリジンがシンタ(航宙機＝ＵＦＯ)に搭乗してハヨピラの丘に天降り、アイヌと生活を共にしながら彼らの手本となって民族を“真の人間らしくあれ”と教導した太陽神オキクルミカムイであったことは、アイヌ民族の聖典『カムイオイナ(以下オイナ)』や叙事詩『ユーカラ』に謡われ、語り継がれた通りである。

“人間らしくあれ”、即ち“アイヌらしくあれ”との「アイヌ」なる言葉は、オキクルミカムイに由来している。

「アイヌ」との名称は、カムイの教えを遂行し、他の人のために己の身命を賭すことも厭わない人間の行為の実践者(地域の首長格)達に付与された尊称なのである。

あくまでも「人間の行為の実践」がキーポイントとなってくるのである。

狩猟、採取、遊牧を基本とする北欧のサーミを含め多くの北方系少数民族の名称は、アイヌと同様「人間」を意味しており、彼らは西洋文明の導入には消極的であった。

アイヌ民族がおよそ固有の慣習、風習と信じている家や丸木舟の造り方、狩猟や漁労の仕方、アツシの織り方、イナウの削り方などの一切はオキクルミカムイに淵源しており、“二重の明光、三重の明光”或いは“神衣、日輪の象を縫い出したる”として『オイナ』が謳いあげた太陽円盤マーク、それこそがアイヌ民族のオリジンであり、文化であり、精

★アイヌ聖典 神傳 (カムイオイナ)★

神の工(タクミ)の山城の
我を育てし山城の
山城の東の軒
山城の西の軒
日輪の象を彫がき
そのおもて
二重の明光
三重の明光
差し延へて
山城の際照りわたり
輝きわたる。

・・・ わが育ちし家の
戸外のたゝずまひを
初めて見る
草屋の葺きそぎには
金の平金を折被せ
二重のひかり
三重のひかり
差し延へ、
そのおもて
輝りわたり
輝きわたる
よろしきかな

われ感動す。
・・・養姉
奥の寝所に行き
祖母の實嚢を
取り出し、
なかより神衣
日輪の象を
縫い出したる、
そのおもて輝き渡り、
これがため養姉は
人の形成しては
見えがたし。・・・

札幌市アイヌ文化交流センター ピリカコタンの敷地に展示されたイタオマチプ【外洋船・板綴り船】（北海道札幌市黄金湯）

神であり、即ち“アイデンティティ”なのである。

故に『オイナ』は古老の口から口へと一語も違えじと敬虔に伝承されてきたのであるが、何時の頃からかその伝承が途切れた結果として、アイヌ文化から太陽マーク（円文・多重円文・渦巻文・ワラビテ文・三角文など）、即ち真のアイヌ文化が失われたのである。

渦巻文は継承されてはいるがその深遠なる意味が理解されていないのである。

現代に復活したアイヌの海洋船イタオマチプ（外洋船・板綴り舟）の側面に、何故に太陽マークを装飾した飾り板が取り付けられているのか。

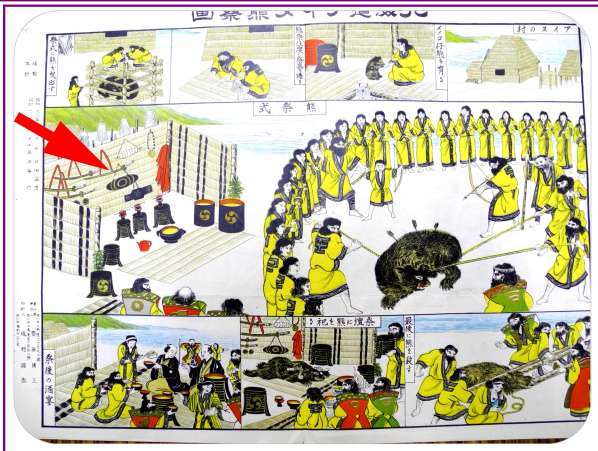
また民族にとっての重要な儀式、儀礼である“イヨマンテ（熊送り）”の祭壇中央に、何故に太陽マークが掲げられているのか。

民族のオリジンを見失いヤマトの神道同様の多神教に傾倒し、アミニズムに陥っている現況を見るにつけ、如何にアイヌを自認しようともそれを理解することは不可能に近い。

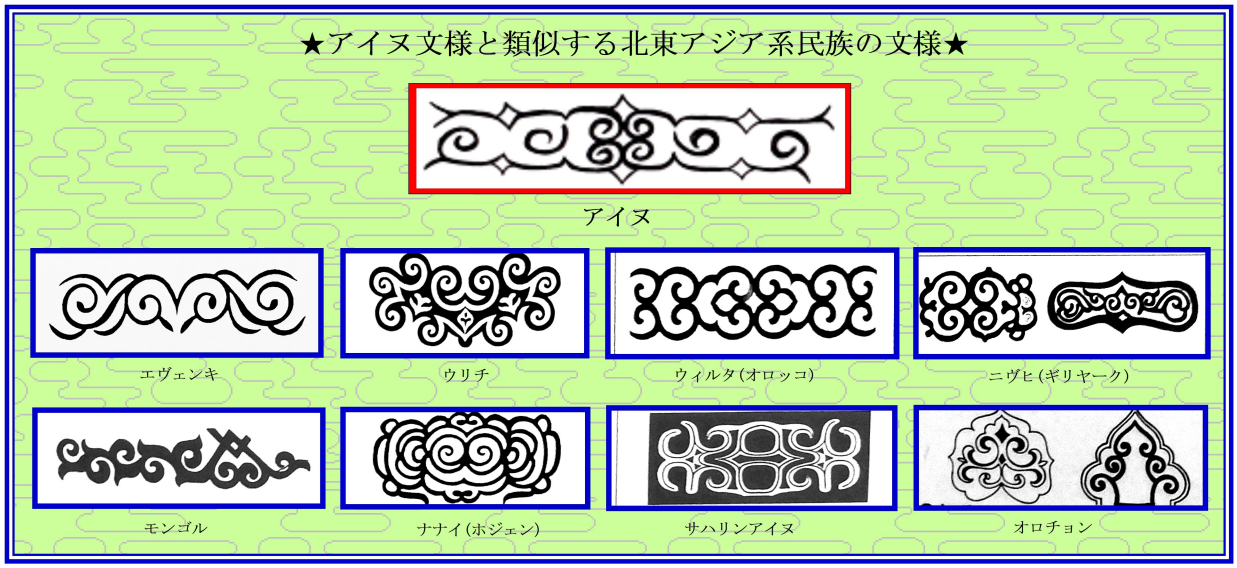
例えアイヌ語に熟知し、儀式・文化を継承し、自然との共生に熱弁を振るおうとも日本国政府（ヤマト）に迎合した姿勢では、真のアイヌの生き方であるとは言えないのである。

では「アイヌとは何か？」それを定義付けるには如何なる基準、条件が必要なのであろうか。

それはブラッド（ＤＮＡ）によるものか、カラーによるものか、ルックスやスタイルによ



北海道アイヌ熊祭り画に描かれた祭壇中央に掲げられた多重円としての太陽円盤（シンタ=UFO）



るものか、アイヌ語に堪能なことか、それともこれらの要素の複合化なのか、あるいはそれ以外の定義が存在するのであろうか。

日本最大のアイヌ民族の団体である「公益社団法人北海道アイヌ協会(以下アイヌ協会)」の定款によると、協会の法人の会員とは、各地区に設けられたアイヌ協会の50団体が第1類正会員、それに第2正会員60名を加えたものであるという。

協会の構成員(会員)としてその資格を得るには、まず居住地区の団体への入会が義務付けられ、その入会には以下の基準を満たさなければならない。

(1)アイヌの系譜(血縁)を引くこと

(2)系譜を引く者の配偶者であること

(3)系譜を引く者の養子(一代限り)であること

それに加えて文章化はされていないが各個人に「アイヌの系譜」を証明する書類、例えば全部事項証明書・改製原戸籍・家計図・旧土人付与地証明書・学者記載の集落名簿他などの提出が求められている。

その条件をクリアした者が晴れて協会の構成員(会員)と認定される訳である。

しかしながら、アイヌの系譜を引かない配偶者や養子がアイヌと認定されているのに対して、必要書類が準備できないか、何がしかの事情で会員申請が適わない人々は、例えアイヌであるとの代々の伝聞があろうとも会員として正式に認定されることはなく、不公平感が滲みでている。

アイヌ協会活動促進費を含めてアイヌの人々には補助金・助成金・貸付金・事業費などの名目で優遇措置としての様々な制度が準備されている。

会員資格を有しなくとも各地区の代表者及び市町村長の推薦状があれば制度の申請は可能とされているが、実際には会員以外の者が推薦状を得ることは極めて厳しいようだ。

道や国(政府)は、アイヌ協会の会員をアイヌと限定し、アイヌ協会を交渉の窓口(アイヌの声の代弁者)と認定しているようだが、果たして協会は多くのアイヌの声の代弁者であると胸を張って言うことができるのであろうか?

北海道環境生活部による「2017北海道アイヌ生活実態調査報告書」を参考にすると、アイヌ民族の人数は、1979年～2006年までは約2万3千～2万4千人で推移していたが、前回(2013年)の調査では約1万7千人に減少、今回(2

017年)の調査ではさらに約1万3千人と激減している。

個人情報保護法の施行に加えてアイヌへの一方的差別と無理解が、アイヌの系譜を引いていても出自を打ち明けられない土壌を作り上げてしまったことは否めず、それがこのような数字に反映されたのかもしれない。

道の実態調査手法にも問題があるようだ。

専門家は「民族の血を受け継ぎながら、調査対象から漏れた人は数万人以上である」と指摘している(北海道新聞2018/6/15)。

一方アイヌ協会の会員(構成員)数も「2006年(平成18年)の約3,800名から約1,000名以上減少している」という(日本経済新聞2018/8/27)。

2019年現在のアイヌ協会構成員数は約2,200名である。

そこで一つの重要な指標となるアイヌ協会の組織率を2017年のアイヌの総数13,118から求めると、その数値は約16.8%となった。

道の実態調査に問題があるとの声も聞かれるのでアイヌの総数を仮に20,000に嵩上げして計算すると組織率は11%で、総数の約1割しか会員登録していないことになる。

会員数に変動がない限り、総数が増加するほど組織率は低下する訳であるから、このように低い数値では統計学的に見ても多くのアイヌの声を代弁しているとは到底言い難いのである。

「先住民族アイヌの尊厳を確立するため、人種・民族に基づくあらゆる障壁を克服し、その社会的地位と文化の保存・伝承及び発展に寄与すること」を目的としているとした北海道アイヌ協会のスローガンが存在する。

会員数の減少には多様な要素が考えられるが、アイヌ協会が掲げた目的と現実の行動には、会員認定の条件も含めて少なからず違和感を覚えずにはいられない。

政府は2019年2月15日の閣議でアイヌ民族を「先住民族」と始めて明記したアイヌ新法案を閣議決定し、同年3月19日に参議院本会議でそれを可決、成立した。

しかし、新法の目的はアイヌ民族の儀式(カムイノミ、イチャルパ)や文化伝承、及び経済、観光振興に限定されたもので、先住民族として最も肝心な自決権・土地権を含む先住民族固有の権利に関しては一行も触れられてはいないのが実情である。

北海道の他のアイヌ団体が、日本外国特派員協会で行った記者会見の席上「先住権が明記されていない」と新法案を公然と批判したが、アイヌ協会はその問題には言及せず、予算獲得を最優先とした日本国政府への従属的スタンスを一歩たりとも変えようとはしていない。

まるで古代のローマ帝国とイスラエル、或いは現代の日本国と米国との従属関係を見せ付けられているようだ。

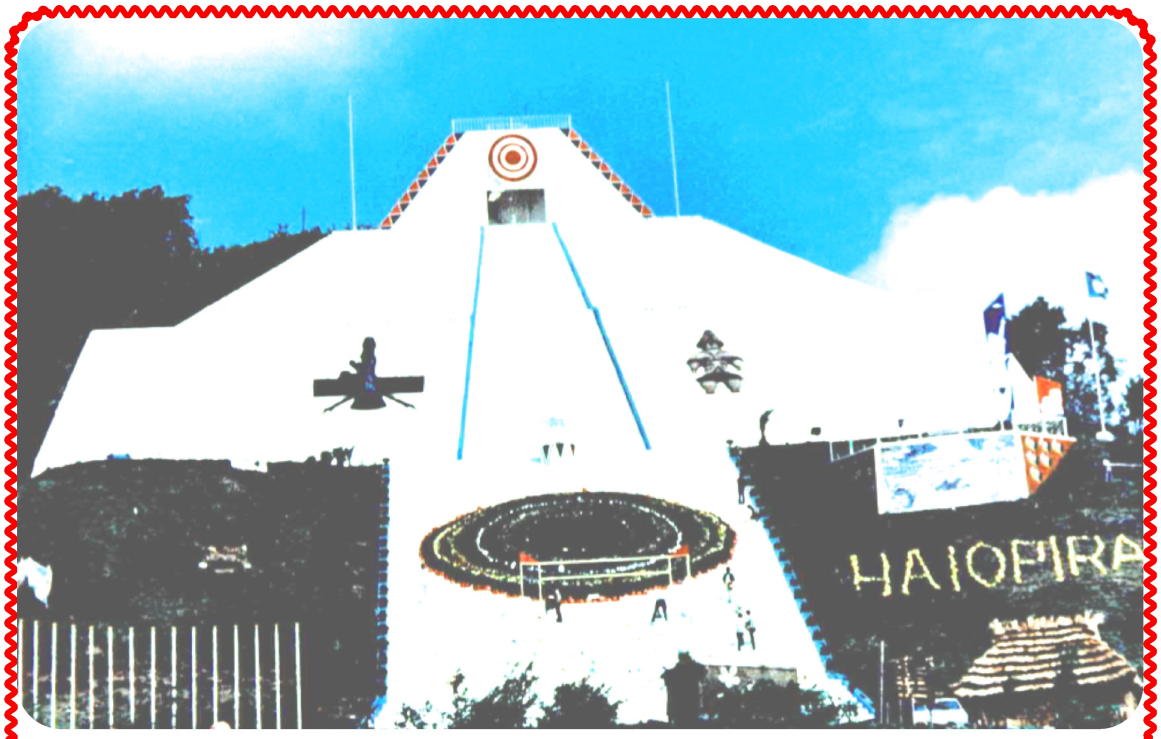
新法案の文言が示唆するように国がアイヌを観光化・見世物化している姿勢がありありと見てとれる。

国は2020年のオリンピックイヤーを見据えて、北海道白老町に来年4月にオープン予定の巨大なハコモノ施設であるウポポイ(民族共生象徴空間)を整備中だ。

その整備自体がアイヌ民族を観光化、見世物化する国の露骨な政策の表れなのである。

かつて日本列島はアイヌが統治し、人間の王国を建設していたが、アイヌ協会は約2千年に及んだヤマト(日本国政府)の理不尽な侵略行為と、それに対する先人の生命を賭した抵抗の歴史をきれいさっぱりと忘れ去ってしまっているようだ。

それが先住民族の居住地域問題に弊害とし



現代に復活した三重の明光が燦然と輝くハヨピラの太陽のピラミッド(北海道沙流郡平取町)

て表れているのである。

日本政府は「アイヌを樺太(サハリン)と千島列島を含む北海道という限定されたエリアの先住民族である」と定義付けている。

だが考古学、形態人類学、遺伝子学などの見地から考察してみても、日本の原住民は列島に居住した縄文人であることは明らかなのである。

比率的にその縄文人の遺伝子を最も多く受け継いでいるのが、現日本人の中核をなす朝鮮系ヤマト人や中国系ヤマト人ではなくアイヌ人なのである。

それに次いで多いのがオキナワ人である。

しかるに正しい歴史認識をないがしろにして国の意向を忖度する御用学者達の見解を、疑いも無くアイヌ協会が採用している姿勢は実に嘆かわしい限りなのである。

天(宇宙)よりハヨピラの丘に降臨した太陽神オキクルミカムイとの詳細なコンタクトの歴史を現代に伝え、『アイヌ・ネノ・アンアイヌ』を掲げた偉大なアイヌ民族の誇りは失われてしまったのであろうか。

地球に数多民族が存在するが、宇宙との詳細なコンタクトの記録を現代に伝えているのは、イスラエル民族、ホピ族、そしてアイヌ民族をおいて他には存在しないのである。

1980年代に若くしてこの世を去ったアイヌ解放運動を牽引した活動家が、「アイヌ宣言」や考古学的視点からの「縄文人＝アイヌ説」を打ち出したが、残念なことに同族より過激派のレッテルを貼られたことでウタリ協会(現アイヌ協会)の理事を辞任、協会とも疎遠になった。

もし、彼の言動を協会側が多少でも受け入れていたなら、アイヌ民族の歩むべき方向も少しは変わっていたのかもしれない。

アイヌとは血の系譜ではなく正義に立脚したオキクルミカムイが教導した人間精神の遂行であることは、大国主、磐井、ナガスネヒコ、複数の戸部、建御名方命(伊勢津彦)、両面スクナ、アテルイやモレ、コシャマイン、タナサカシ、シャクシャマインたちの生き方に強く表れており、本テーマの「八面大王の実像」を介してそれをより深く知ることがで

きたのである。

アイヌは北海道とその周辺の先住民族でもなければ、観光客相手の舞踊集団でも、儀式集団でも決してないのである。

既に不可逆的状況にある核施設や核兵器、及び利便性と安楽性を追及するイノベーションに依拠した自然の摂理に抵触する破壊的、狂気的物質文明が、経済を隠れ蓑にした世界の富の収奪者とその利権に群がる権力者達によって推進されてきたのは周知の事実である。

それらの推進者の権力欲、物資欲、金銭欲の象徴である物質文明に対して、勇気を持ってノーを突きつけ、あえていうならば一人でも多くの洗脳された人々の目を覚醒させるのがアイヌ＝人間本来のミッションである。

その過程において、かつてオキクルミカムイが教導した真の人間の世界である太陽王国が築かれるのである。

アイヌの系譜を引く、引かないの問題では断じてないのである。

遥かな古代から、物質文明に傾倒した多くの国家が不条理で非人間的な行為を推進した結果、人類は自ら作りだした解決不可能な多くの難問(エネルギー、食料･水、核、民族･人種対立、覇権争い、難民、温暖化、異常気象、自然破壊など)に直面した。

紀元前5世紀から紀元13世紀にかけてアジアでは、ペルシャ(アケメネス朝)、イスラム、モンゴルなどの大帝国が樹立された。

ペルシャ王であったキュロスⅡ世と後継者のダリウスⅠ世、イスラム教とイスラム国の礎を築いた預言者マホメット、そしてモンゴルの覇者にして世界最大の帝国を築いたチンギス･カンの何れもが、太陽神に選ばれコンタクトに至っている。

彼らの行動は、単なる地域の覇権争いや領土の拡張を主眼としたものとは異なり、人間文明対非人間文明、或いは太陽王国対非太陽王国という宇宙正義に基づいた聖戦の遂行の何ものでもなかったのである。

一言でいうならば、非人間文明であるギリシャ文明に象徴される西洋文明(物質文明)の波及と台頭の阻止が目的であった。

残念ながら徐々に本質を見失っていったモンゴル帝国の崩壊を最後として人類は物質文明に飲み込まれ、18世紀中ごろのイギリスの産業革命を契機として、西洋文明に埋没していったのである。

自然の摂理に抵抗する非人間的人類の行為に対して、邪悪な生き物を一掃せんとしたガイア的遊星地球の磁場は日々減少し、地軸は震え、四六時中鳴動を繰り返して随所にすさまじい大変動到来の前兆を覗かせている。

過去人類は人間性の退廃から、その浄化作用とされた『火と氷と水の洗礼』を3度受けたと「ホピの聖書」は伝えているが、またしてもその洗礼を受けねばならぬようだ。

今日、経済を至上とした世界の物質文明を牽引するリーダー国は、中国、韓国、そして日本にほぼ限定される。

その何れもがヤマト系であることにお気付きであろうか。

巨大なヤマトに果敢に抵抗の狼煙を上げた多くの先人達は、何れ直面するであろう子孫の厳しい未来と物質文明の台頭を憂い、正義の遵守を志して自らの生命を賭すことを厭うことはなかった。

アイヌ(人間)達よ勇気をもって立ち上がれ、畏れることなく先人が歩んだ正義の道を踏襲せよ！！

アイヌの精神に目覚めた現代の「八面大王」は、今何処にいるのであろうか！！

〈J.N、K.N〉